

宮城山岳

第 28 号

2024 年 5 月



Grossglockner (3,798m)

オーストリア最高峰

Miyagi Section of The Japanese Alpine Club

目 次

1	巻頭言・・・・・・・・・・支部長 千石信夫・・・・・・・・・・	2
2	2023年度の山行記録(共益事業山行・公益事業山行)・・事務局・・	3
3	2023年度 山行事業以外の宮城支部活動記録・・事務局・・	25
	全国山岳古道調査	
	山の天気ライブ授業 ほか	
4	2023年度 宮城支部以外の行事参加記録・・事務局・・	32
5	紀行・随筆・エッセー・・・・・・・・・・・・・・・・	40
	「憧れの裏岩手縦走」・・・・・八尾 寛	
6	新会員・新準会員・新支部友 自己紹介・・・・・・・・	45
	「山には文字から入った」・・・・・石川弘子	
	「山の魅力と多様性」・・・・・鈴木則文	
	「山々にいざなわれて・・」・・・・・鈴木泰子	
	「山との出会いに感謝」・・・・・松元秀平	
7	宮城支部 定例事業の概要・・・・・・・・・・事務局・・	53
8	公益社団法人日本山岳会 宮城支部個人情報保護管理指針・事務局・	55
9	宮城支部 収支会計報告・・・・・・・・・・事務局・・	58
	〈表紙写真〉表表紙：台湾・玉山（撮影：冨塚和衛会員）	
	裏表紙：台湾・新高山(現・玉山)登山口（撮影：冨塚和衛会員）	

巻 頭 言

支部長 千石信夫

来年はいよいよ日本山岳会創立 120 周年となります。記念事業も佳境に入り、全国で様々な記念事業が進行中ではありますが、宮城支部でも全国山岳古道調査が各方面のご協力をいただき、お蔭様で調査のまとめ作業に入ってきているところでございます。

宮城支部の一年を振り返ってみますと、春には七ッ森「七葉師掛け」を全行程踏破、6 月には 120 周年記念事業である「山の天気ライブ授業」を開催、7 月には東北北海道地区集会・青森支部 30 周年記念集会に参加、そしてオーストラリアにトレッキング、9 月には群馬にて全国支部懇談会に参加、10 月には自然保護全国集会において宮城県の山地および丘陵地における風力発電事業計画に対する宮城支部の見解を発表するなど実施してきました。そのほか定例山行など盛りだくさんの行事でしたが、お蔭様でほぼ計画通りに実施し、充実した一年だったと思います。さらに新しい顔ぶれが入会されたこともあって、新風が吹き始めたように感じております。先日の総会におきましても、女性を含む 3 名の新役員が選任されました。支部運営の改善や活性化などに尽力していただきたいと願っております。

先月の「宮城山岳通信」でも触れましたが、そろそろ本部での総会も開催されますが、総会に先立って支部連絡会議などにおいて、橋本しをり会長から会の方向性など話がありました。それは『みんなの日本山岳会』をスローガンとした取り組みであります。その対策の一つに「安全登山の啓蒙推進」を上げられております。宮城支部においても公益事業の活動の一つとして、登山者が自らリスク回避できる知識や技術を身に付け、安全な登山を楽しむことを目的とした講座を、外部から講師を招き毎年開催したいと考えております。この事業は継続的に講座を開催することで、一般の登山者の安全に寄与することと同時に、支部会員の知識や技術もレベルアップしていくことになることを期待しております。

会員の皆さま、新年度も会の行事に積極的に参加され、交流を深められることを祈念します。

2023 年度 山行記録

【共益事業山行】

(1) 春山山行（七ッ森「七薬師かけ」）

実施日 令和 5 年 5 月 27 日（土）

山 域 七薬師掛け（七ッ森＋2 座全山縦走）

コース 玉ヶ池駐車場～たがら森～^{とがくら}遂倉山～鎌倉山～大倉山～^{なでくら}撫倉山～松倉山
～^{しんぎょうじ}信楽寺跡～堂ヶ森～笹倉山登山口～玉ヶ池駐車場

参加者 会員＝細川光一（CL）、千石信夫、冨塚和衛、冨塚真味子、準会員＝
八尾寛、支部友＝小林浩彦、白井浩 計 7 名

七ッ森は古より石神山精神社、古より信仰の山であり霊地。今から 250 余年
前、宮床伊達家の家臣・八巻景任、景長親子が背負って安置したと伝えられる
薬師如来七峯を、一日で巡拝する風習が「七薬師掛け」。この七つの険しい山道
を踏破することが今回の山行。無病息災を願い計画する。

全行程踏破組は、休憩含み 12～14 時間予定。全てを歩き切る班と、笹倉山を
除く 2 班の計画となりました。

当日の集合場所は山域入口のセブンイレブン。早朝 4 時、当初、全行程踏破
組員の配車は玉ヶ池でしたが、スペースが無く、ダム下に変更。信楽寺に 2 台、
ダム下 3 台とし、その地点から全員、夜が明けきらない 5 時にスタートした。

まずは車路よりスタートし、イノシシのガードフェンスを開けると本番とな
る。陽が差し込まない沢で北入口を行き過ぎたが、目覚めの急登を無事登り“た
がら森”。ここは、以前は薬師如
来でしたが、今は文殊菩薩が安置。
まずは記念撮影（その後も行程を
考慮し、水分補給と記念撮影の短
い休憩をとる）。

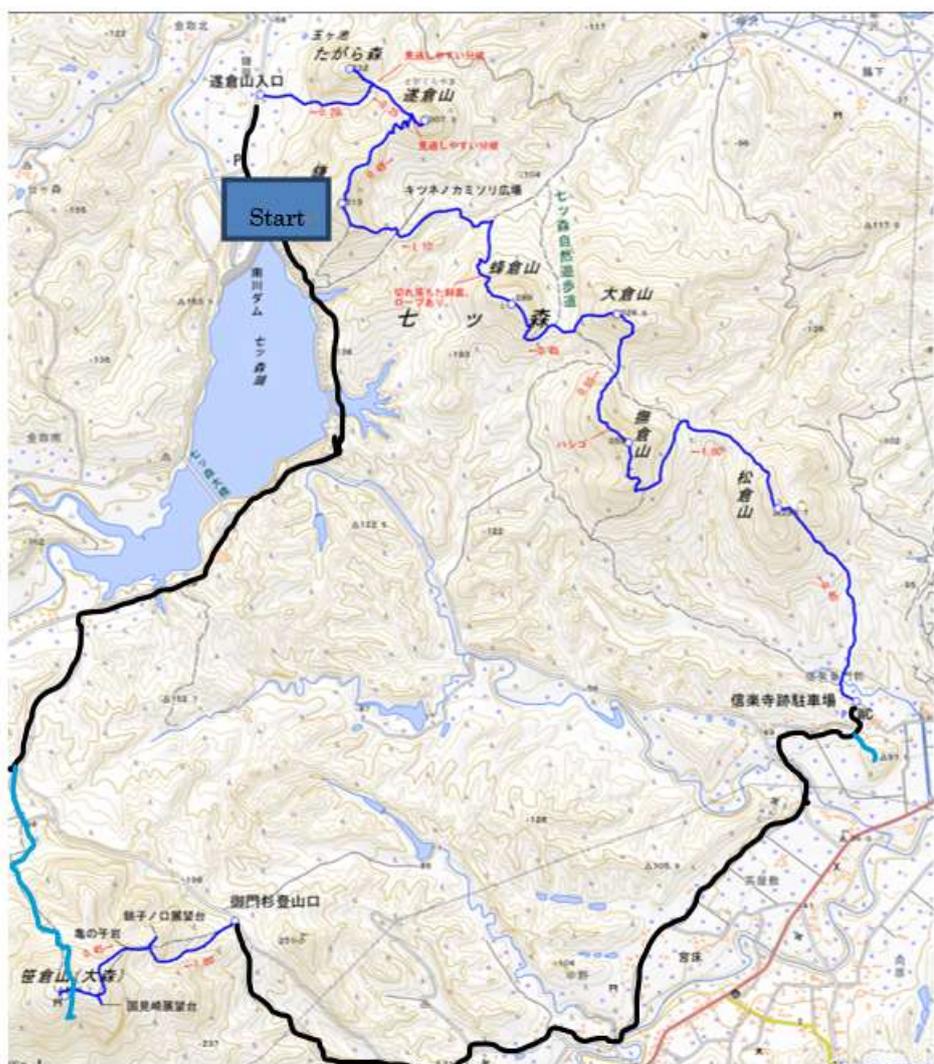
“たがら山”からは登山路折り
返し、遂倉山、鎌倉山、^{はちくら}蜂倉山、
大倉山を同様に、ロープの助けを



山行 10 日後の七ツ森の朝



笹倉山	松倉山	撫倉山	大倉山	蜂倉山	鎌倉山	遂倉山	たがら山
506.5m	291.2m	359.0m	327.1m	289.0m	313.0m	307.8m	232.0m



ルート図 青線：山岳ルート 黒線：車道ルート

借りた登り下り。山頂での水分補給と記念撮影を繰り返す。笹倉山を除くこの山城最高峰・撫倉山は、コース唯一のハシゴ登りを終えて間もない。山頂から

は、大和町そして栗駒山や太平洋が見渡せる七ッ森山頂で一番のパノラマ。

残す松倉山。やはりロープの助けを借り山頂。下山は、早春には二輪草で登りを忘れる坂も、今は浮石に注意が必要な長いロープ区間を終えると、信楽寺跡に到着。そこには休憩できる簡単な椅子テーブル、給水できる蛇口があり、早めの昼食と水分補給で長めの休憩となる。

次は、七ッ森に数えられていない“洞が森”(97m)の神社のお参りは、やはりイノシシ除けの金網の扉からのピストン。ここで、ここまでの2人と別れる(一人は笹倉山の下山路で待合せ)。別れを終え、いよいよ登るより辛い、車道の行進。

この行程が今回の山行で一番厳しいと思われ、無情にも5月とは思えない陽の強さで会話も無く、ひたすら笹倉山駐車場を目指す。駐車場では水分補給と笹倉からのロードを考え、長めの休憩となる。

駐車場からのコースは、ロープも梯子もない一般的なルートでホッとする。一気に山頂手前、今日の行程が見渡せる国見崎展望台に立ち寄り、今日踏破したコースの達成感に浸り、笹倉山に到着。お参りと達成感を祝う。

東から登って下山路は、北方向への下山ルート。木立に囲まれた今回の山行で、一番ゆったりとした山道で、個人のトレーニングでは駐車場からの往復のみでしたが、嬉しい発見でした。これから待ち受ける“死のロード”をまえに



ホッと一息。車路には1台の車がお迎え、2人がここまでとなる。

別れを告げ、残る3人は休憩せず車道をスタート。到着地点は、登りは少なく、夕暮れが映える南川ダム湖畔道路を終えて、直ぐにたどり着く。

“早朝5時出発、夕方5時着”

▲笹倉山山頂で踏破達成を祝う

12時間の山旅、お疲れ様でした。

後日、八尾会員からのお礼のメールに――若者ら長者娘競いしな無病息災七薬師掛け 縄伝ひ険しき坂の上り下り力試しの頂き七つ 道はるか母なる山に分け入れば 森深くして人を迎へり(笹森山)

が添えられていました。有り難うございました。

(報告者：細川光一)

(2) 梅雨払い山行(南蔵王・水引入道)

実施日 令和5年6月25日(日)

山 域 南蔵王・水引入道(1656m)

コース 白石スキー場駐車場(842m)～林道登山口(813m)～大日向(1580m)～水引入道(1656m)～同ルート下山

参加者 会員＝千石信夫(C L)、佐藤昭次郎、準会員＝八尾寛、佐藤善武、支部友＝村上敏郎、白井浩、小林浩彦 計7名

梅雨明けは、まだまだ先のようにだが、予想天気図によれば梅雨前線は、本州の南海上に停滞し、東北地方は日本海に中心を持つ高気圧のへりに覆われる見込みだ。上空は薄い雲に覆われてはいたが、空は明るく、見晴らしもよかった。参加者全員が集合し、自己紹介した。小林氏が前回山行(七薬師掛け)の写真集を各参加者に配布して下さった。ひとしきり苦労話に花を咲かせたが、さて、本日の山行や、いかに・・・。

予定通り7時に駐車場を出発し、しばらく神嶺林道を歩いた。後ろから来た車に追い越されたので、登山口周辺に駐車できるのかもしれない。7時30分、ジャンボリー・コース登山口に到着した。登山口の表示板があることはあるが、小さいので見落とすところだった。

エゾハルゼミのにぎやかな鳴き声に送られながら、針葉樹とブナの混合林の緩やかな坂を登り始めたが、すぐに10人ほどのパーティに追い越された。東北学院高校の山岳部と



のこと。昨晚、南蔵王青少年野営場でキャンプし、水引平まで往復するそうだ。

このコースは、どんどん登っているにもかかわらず、同じような風景が続き、いま、どのあたりを歩いているのか皆目わからない。

しだいに傾斜が急になり、綱をつかんでよじ登るような場所も現れた。登山道にはサラサドウダンの花が散り積もっており、季節の移り変わりを感じた。代わりにウラジロヨウラクが咲き始めていた。

さらに尾根を巻くように道が続き、小さなアップダウンを繰り返した。左手には南屏風岳から不忘山に至る主稜が望まれ、その先に七ヶ宿町の山々が連なっていた。主稜の中腹には薄く雲がかかり、いかにも深山幽谷の趣があった。麓に白く輝く水面は、長老湖だろうか……。この辺りへ来ると木々の背丈も低くなり、ナナカマドが白い花をつけていた。コバイケイソウ、ゴゼンタチバナ、ツクバネソウ、ツマトリソウなどが登山道わきに次々と現れ、疲れを癒やしてくれた。そのなかに小さな白い花をつけたランが一株、美しく咲いていた。村上氏によれば、オノエランという希少種であるとのこと。植物に関する村上氏の知識の深さに皆が敬服した。

灌木地帯を抜け、10時30分、ガレ場に出た。大日向である。道標が立っているが、文字が消えかかって読み取れない。ここからは不忘山、南屏風岳から屏風岳に至る主稜線が一望できた。ところどころ谷筋に残雪が見えた。谷を越えて流れてくる風が、それまでの疲れを癒ししてくれた。

目を転ずると、水引入道の頂上が眼前にそびえていた。コガ沢からの登山道



▲水引入道頂上にて。左から佐藤(昭)、八尾、小林、白井、村上、佐藤(善)

を合わせ、岩稜帯を登り始めると、タカネバラとウスユキソウが混じって咲いていた。岩肌に赤、白、緑のコントラストが映え、その美しさに、しばし足を止めた。ウスユキソウがエーデルワイスの近縁種であるという村上氏の話に、チロルの山旅を連想した。山を下ってくる高校生パーティとすれ違いながら、ぐんぐん高度を上げ11時頃、水引入道頂上に到達した。

さて、山頂で行動食を**摂ったり**、記念撮影などをしていると、ジャンボリー・コースで我々を追い越した女性の二人連れが、水引平から引き返してきた。頂上からの展望は、遮るものがなく、はるか屏風岳山頂へ続く登山道が見渡せ、挑戦心がふつつつと沸き上がった。そこで、村上氏を除く6名が屏風岳へ向かい、水引入道を下った。この登り返しの道も心地よく、ハクサンチドリやチングルマの花々が出迎えてくれた。すでに綿毛を付けたチングルマもあり、場所により季節の訪れが異なるのだろう。

しばらく登り、11時20分、水引平に到着した。水引平は小さいながら湿原になっていて、池塘が一つできていた。池塘にはテニスボール大のゼリー状の塊が、ゴロゴロと漂っていた。その脇には数匹の黒いサンショウウオが群がっていたので、サンショウウオの卵囊であろう。池塘の畔にワタスゲが花をつけていた。ここから屏風岳頂上までは、コースタイムで往復約1時間半が見込まれるが、ここままで撤退しようという提案が千石氏から出された。予定を1時間ほど超過していることと、メンバーの疲労を慮ってのことと思われる。そこで、水引平で昼食をとり、記念撮影を済ませ、水引入道へ引き返した。

12時00分、登りと同じコースをたどり、村上氏と再会し、山頂を下り始めた。途中、大日向でコガ沢沿いのコースを登ってきたという女性の二人連れと出会った。かなり険しい登りだったので、少し休んでからジャンボリー・コースを下ろうと考えているとのこと。我々のほうは時間に余裕あることもあり、のんびり下って行った。

下りとはいえ、同じような景色の中を歩くのは、精神的に疲れるものだ。“ぐるぐると同じ場所を歩かされているのではないか”という冗談も飛び出すほどだ。途中で道標やベンチなどの目印があれば、少しは楽になるのではないかと思われる。



▲水引平にて記念撮影。前列左より小林、

休み休み下りていくと、先ほど 八尾、後列左から佐藤(善)、白井、佐藤(昭)の二人連れが、楽しそうに話をしながら追い越し、ずんずん下って行った。こ

ういった長丁場を乗り切るコツを教えられたように思う。

やがて、登り初めに見かけたギンリョウソウを見つけ、出口は近いぞと元気をもらい、14時30分、神嶺林道に降り立った。15時00分、予定より30分早く白石スキー場に到着。全員無事を確認し、解散した。筆者と佐藤善武氏は、遠刈田温泉・神の湯に立ち寄り、全行程8時間の汗と疲れを洗い流した。

(報告者：八尾 寛)

(3) オーストリア・トレッキング

実施日 令和5年7月14日(金)～23日(日)

山 域 オーストリア・チロル地方

参加者 会員＝千葉正道(L)、千石信夫、冨塚和衛、冨塚眞味子、鳥田笑美、草野洋一、支部友＝鳥田伊志、一般＝千石裕子 計8名

ヨーロッパ・アルプスの東部に位置するオーストリアの3拠点を中心に、8人でトレッキングに行ってきました。モーツァルトの生誕地も訪ねました。

7月14日(金) 前泊して羽田空港に7時集合。9時40分発ルフトハンザ航空LH715便に搭乗。ミュンヘン空港着16時50分(以下現地時間、時差7時間)。専用車で最初の拠点地チロル州ゼーフェルト(Seefeld=1180m)へ。20時30分ホテル「Haymon」着。時間が遅いので用意されていた夕食をとってから部屋へ。

○15日～16日 ゼーフェルト＝1964、76年の冬季オリンピック開催地インスブルック近郊でジャンプ競技等の会場になった。

15日(土) トレッキング初日は郊外をゆっくりと歩くコースへ。春の雪解けとともに姿を現し、秋に姿を消してしまう湖を目指す。快晴のなかホテルを9時すぎに出発。10分ほど歩いた駅前の案内所で今日予定しているコースの説明を受けて、湖水群の一つ Moserer See(1284m)へ昼前に着く。地元の人が海水浴ならぬ湖水浴をしていた。海に面していないオーストリアでは、晴れた日は湖水浴を楽しんでいるようだ。

お腹がすいたころ、目指すレストラン「Wildmoosalm」に到着して昼食。冷えた



▲ゼーキルヒル教会をバックに
(チロル州ゼーフェルト)

コンサートが開かれるとの看板を見て、皆で出かけた。地元の人がそれぞれの楽器を携えて演奏しているような素朴な音楽祭だった。昨日は遅い到着だったので、今日は軽いハイキングのつもりだったが、33度超の強い日射しの中、歩数計は3万歩近い数字を出していた。

16日(日) ゼーフェルトの人気コースであるライター・シュピッツェへ。ホテル8時30分出発。曇り空で肌寒い。駅から歩いて15分ほどで地上ケーブルカーの乗り場。終点から空中ケーブルカーを乗り継ぐ。降り場にはレストランが併設されていた。

9時40分、登山開始。尾根伝いにピーク2つを越えて、昼前に頂上直下のコルで小休止。この先、ヤセ尾根の岩場が連続し、梯子を使って登るなど緊張を強いられる。12時45分、頂上。360度の展望を満喫して、13時に反対側に下山する。肩の小

生ビールを飲んで大満足。食事のあと快晴で暑い中、市内に戻るコースを歩いていると、明日登るライター・シュピッツ(Reither Spitze 2374m)がくっきり見える。その山容は槍ヶ岳の形にそっくり。山頂の右下には肩の小屋を思わせる山小屋が見えた。

16時にホテルに着き、17時夕食。

18時30分から市内の広場でサマー



▲ゼーフェルターシュピッツェ(2221m)からライターシュピッツェ(2374m)へ向かう稜線を歩く(チロル州ゼーフェルト)

屋を思わせる小屋 Nordlingerhutte に 13 時 40 分着。生ビール「Zipfer」を飲み



▲ライターシュピッツェにて(16日)



▲ネルトゥリンガーヒュッテ(16日)

〈ドイツ山岳協会の山小屋〉

13 時 40 分にホテルに戻り夕食。ホテルへ帰るときに、今旅行で初めて日本人のツアー客に遭遇した。22 時過ぎに雷雨があった。

18 日(火) 曇りの中、近郊の山シャーレック (Schareck 2606m) へ。8 時 30 分ホテル発。登山口 8 時 50 分。樹林(ドイツトウヒ)の中をしばらく歩く。用材と

ながら遅い昼食をとる。14 時 30 分、小屋を出る。巻き道を通り、ケーブルカー乗り場に 15 時 30 分。地上ケーブルカーを乗り継ぎ、ホテル着 16 時 45 分。好天に恵まれた一日だった。

○17 日～18 日 ハイリゲンブルート (Heiligenblut 1291m)

17 日(月) ホテル発 8 時 30 分。専用車で次の宿泊地ハイリゲンブルートへ。途中、高速道路沿いにスワロフスキーの大きな工場があった。

Kitzbuhel、Lienz を通過。朝方曇っていたが昼前に快晴になり、有料道路に入って眼下の溪谷を挟んで連山が見えるところにくると、ドライバーは“ビューポイント！”と言って度々停車。

13 時 40 分、ハイリゲンブルート着。「Hotel Heiligenblut」にチェックインしてから町の散策へ。町のシンボルで尖塔が際立つ教会を見学してインフォメーションセンターへ。

明日と明後日のコースの説明を受け、情報を取得した後、各自買い物。16



▲ハイリゲンブルート村(17日)

11時45分、中間駅に向かって下山する。登山道に沿って山肌を赤く染めるアルペンローゼなどの高山植物が途切れなく咲いていて、種類も多く、お花畑を歩いている感じだ。そのなかでヨーロッパ・アルプスを象徴するエーデルワイス2輪を奇跡的に見つけることができた。見つけたのは鳥田笑美さん。今回のトレッキングで見たのは、この2輪だけだった。見晴らしのよいところで行動食の昼食をとり大休止。



▲シャーレック(2607m)山頂にて(18日)

14時15分、中間駅に着き、ケーブルカーに乗り市内へ戻る。14時50分、ホテル着。夕食前にホテルのプールとサウナに行く。16時すぎに雷雨。

○19日～21日ザルツブルグ(Salzburg)

19日(水) 夜半に雨。山間部に立地するため朝はひんやりする。8時30分、ホテル発。ヨーロッパ・アルプスの中で随一の景観を誇るアルペン山岳道路(全長58km、有料)を通過して富士山より22km高いオーストリアの最高峰グロースグロックナー(Grossglockner 3798m)の麓を目指す。

枯れた樹木をチェーンソーで伐採していた。今旅行中、移動するバスから所々で枯木が目についた。ケーブルカー中間駅 ROSSBACH(1750m)に10時25分。ここから上部ケーブルカーを利用する。10分余り乗り、駅に降りると雲海の中だった。11時30分頂上。視界もよくなり周囲の山々を存分に見ることができた。

山腹を走る山岳道路だけに、たびたびドライバーがビューポイントと勧める地点で停車。そのたびにカメラを持って降りる。谷あいには牧場の草原と家々が点在する深い溪谷が続いている。次第に前方に山並みが見えてきた。展望台のあるフランツ・ヨーゼス・ヘーエ(2370m)の駐車場に9時30分着。駐車場から岩峰群を見ながらグロースグロックナーがよく見えるところまで歩く。その途中で、マーモットが草を食んでいるかわいい姿が目前に。快晴で360度見渡せる絶好の景観を堪能できた。

頂上直下には東部アルプス最大のパステルツェ氷河(Pasterze Gletscher)も一望。展望台はレストラン、博物館などがあり大きな施設だ。ここで昼食をとり、各人お土産等を買って13時出発。帰途の途中、山岳道路最高地点(2571m)エー



デルワイスシュピッツェで **▲オーストリア最高峰グロースグロックナーをバックに**
下車。ここから登山路を登れば3000m級の山々を見渡すことができるが、30分ほど歩いたところで時間的制約もあって引き返した。

ドイツ領を30分ほど走り、日射しの強いなかモーツァルト生誕地とサウンド・オブ・ミュージックの舞台になった古都ザルツブルグへ。16時50分、「PARK HOTEL」着。チェックインのあと、フロントで教えてもらった、歩いて20分ほどのピアガーデン&レストラン「IMLAUER」で夕食をとる。大ジョッキのビールが腹に染みわたった。

20日(木) ホテル8時30分出発。9時15分、駅前からバスに乗り、サンクト・ギルゲン(St. Gilgen)の街に10時20分着。ゴンドラで山頂駅へ。15分ほどでツヴェルファーホルン(Zwölferhorn 1521m)山頂。快晴で山頂から眼下の湖と向かいの山々が一望できた。山頂を反対側に下ると小さなヒュッテがあり、そ

の先に小さなピークがある。そのピークの周囲を一周してゴンドラ山頂駅へ戻った。山頂駅のレストランで眼下の街並みを見下ろしながら、昼食とビールで喉をうるおす。街へ降りて山頂から眼下に見えたヴォルフガングゼー湖畔で休憩。

14時35分のバスでザルツブルグへ戻る。新市街のミラベル宮殿(Mirabell)と同庭園を見学。ここで演奏会があることを知ってチケットを申し込んだが、当日券はすでに満席とのことで翌日の予約をした。18時、



▲ツヴェルファーホルン 1521m地点にて夕食は昨日と同じ「IMLAUER」で。ザルツァッハ川沿いを散策してホテルへ帰る。
21日(金) 9時前にホテルを出て、駅前からバスで旧市街へ。丘の上にある街のシンボル、ホーエンザルツブルグ城(Festung Hohen-salzburg)に登る。城を下りて大聖堂(Dom)、そしてモーツァルトの生家と博物館となっている住居を見学。目抜き通りのゲトライデガッセは人混みが多かった。その通りを歩いていたらカフェ「モーツァルト」とあるのを見て、店に入って休憩。街の名物菓子「ノッケル」を注文。街を散策してビアガーデン「BRAU」に入って、昼食兼早い夕食をとる。

16時40分、店を出て駅に向かうべくバス停へ。その途中、ザルツブルグで



▲ザルツブルグの旧市街にある「カフェ・モーツァルト」入口で

ベストセラーのチョコレート「Furst」で購入。ホテルに17時40分。ひと休みして、前日に予約をしたミラベル宮殿の室内楽コンサート会場へ。20時から四重奏(バイオリン、ビオラ、チェロ、ホルン)を聴く。休憩をはさんで2時間。観客は150人余で満員だった。22時終演。

22日(土) 曇り。ホテルのBOX(朝食)を持ってザルツブルグ中央駅へ。7時15分発ミュンヘン行き快速に乗車。途中、国境線で停車、パスポートチェックがあった。ミュンヘン北駅で空港行きに乗り換え、9時過ぎにミュンヘン空港到着。ルフトハンザ航空LH714便で13時20分離陸。

23日(日) 8時15分(日本時間)、羽田空港着。全員、元気に帰国した。荷物を受け取って解散。それぞれ仙台へ帰る。



▲シャーレック中腹に咲くエーデルワイス

前回2019年のアルプス・トレッキングに続いて、今回も千葉会員のルート、宿泊地などオーダーメイドで日程を組んでもらい、ガイド役でお世話になりました。滞在中、天候に恵まれ、存分にオーストリア・アルプスを堪能できて大満足でした。ホテルでの食事も地ビール、ワインで食が進み、ボリュームもあって美味しかった。

羽田—ミュンヘン間、往路は14時間余。北極海上空を通過中は気流が悪く、機内食サービスが一時中断された。復路は中国上空を通り、凡そ12時間余の飛行。往復とも満席だった。(報告者：草野洋一)

(4) 9月山行(月山)

実施日 令和5年9月23日(土・秋分の日)

山 域 月山(1984m)・姥沢コース

参加者 会員＝遠藤幸寿(CL)、草野洋一、加藤知宏、準会員＝石川弘子、支部友＝村上俊郎、一般＝半澤邦広、小原明夫、遠藤久美子、遠藤透
以上9名

当日は晴天の中、車2台に分乗し(JR仙台駅西口集合チーム5名と東北自動車宮城インター駐車場集合チーム4名)、早朝(7:30)の仙台を出発した。

東北自動車道(宮城インター)から山形自動車道(月山湖インター)を経て、姥

沢駐車場に9時50分着。入山協力料(車1台1000円)を支払って、ほぼ満杯の駐車場(300台駐車可)に停めることができた。

午前10時、リフト乗り場へ出発、正面には月山が空高くそびえ立っていた。早速、リフト(リフト券は1人往復1500円)に乗り、上乗り場に10分で到着。トイレを済ませて10時30分、姥ヶ岳への登山コースに向かう。快晴の中、来客の多さにビックリする。



▲見晴らしの良い尾根を登る

11時15分、姥ヶ岳に到着。360度の大展望に、メンバーも他の登山者も感嘆の声を上げる。ここから見える月山は、神社をピークに乗せ、遙か彼方だ。ルート上には点々と登山者が連なって、信仰登山の面影が漂う。ルート上の廃屋跡で昼食となり、各々の持ち場で弁当を広げる。

13時30分、村上さんにテントキーパーを頼んで出発、まもなく頂上稜線に出る。14時15分、快晴無風の頂上神社に着く。みんなで景色を謳歌し、集合写真を撮って下山にかかる。午後になり周りの方たちも下る方たちが多くなる。村上さんと合流の後、朝日連峰を遠望しながら、まだ紅葉には早い芝の草原をリフト乗り場へと向かった。



▲展望が素晴らしい頂上神社で記念撮影

口元からハミングしそうな快適な山行で、15時30分にはリフトに乗車することができた。16時に全員無事、駐車場に到着。整理体操後、車の帰仙コースが異なることから現地解散とした。遠藤車(往路復路同じ)は、17時50分、仙台に無事到着、山行を終了した。

(報告者：遠藤幸寿)

(5) 初冬山行（霊山）

実施日 令和5年12月10日(日)

山 域 霊山(825m 福島県伊達市)

コース 霊山登山口駐車場～日暮岩入口～護摩壇～霊山城跡～(昼食)～東物見岩～日暮岩入口～霊山登山口駐車場

参加者 会員＝加藤知宏(C L)、千石信夫、冨塚和衛、細川光一、松元秀平
準会員＝渡邊典男、石川弘子、八尾寛、支部友会員＝津田久美子、村上せつ子、川島郁子、一般＝千石裕子 以上12名

2023年は記録的な高温が続き、12月の月例山行当日も春を思わせるような陽気の下、12名の会員等に参加いただき実施した。

当日は、午前10時に「りょうぜん紅彩館」の奥にある霊山登山口駐車場に集合、各自自己紹介の後、山行を開始した。



▲霊山最高峰の東物見岩で記念写真

整備された山道を行くと、最初に現れるのは宝寿岩^{ほうじゅいわ}で、慎重に梯子階段を登っていくと展望台のような岩頭となり、眺望が良かった。日暮岩入口^{ひぐらしいわ}を過ぎてからは、緩い登りとなる。国司沢、天狗ノ相撲場などの景観を楽しみ、集合写真を撮りつつ歩を進める。途中、地元の登山者とも交流を深めた。

この先の護摩壇入口から本道を外れ、護摩壇へと向かう。護摩壇には大きくえぐられた洞穴などの造形がある岩場で、遠く吾妻連峰などを望むことができるが、当日は霞んで残念ながらハッキリとは見えなかった。

護摩壇を大きく回りこみ、霊山城跡へ向かう。正午前に霊山城跡に到着。一帯は手頃な広場となっており、霊山の案内看板やトイレ、石碑などがある。ここで昼食をとり、メンバー全員で記念撮影をする。そこから10分ほど行くと、霊山最高峰である東物見岩に至る。ここからは麓の玉野集落、遠くには蔵王連峰や鹿狼山^{かろうさん}が望めた。ここでもメンバー全員で記念撮影をする。



その後、下山を開始した。蟻ノ戸渡りという幅の狭い岩場を通過し、五百羅漢岩や弘法突貫岩、弁天岩、日暮岩などの奇岩を望みながら、予定通りの午後1時40分に霊山登山口駐車場に到着し、解散した。メンバーの皆

▲狭い岩場である蟻の戸渡りを通過する

さんは元気な様子だった。

今回は落葉後の山行だったので、季節を変えて新緑や紅葉の季節に、また登ってみたいと思う。また霊山は、貞観元年(859年)に修験道の霊山寺として開山され、南北朝時代には北畠顕家が霊山城を築いて、激しい戦いの舞台となるなど古い歴史を誇る霊峰であるが、南北朝時代の戦乱により、現在は礎石などを残すのみ。山麓に往時の流れを汲む寺社(霊山寺、霊山神社)があるので、霊山に秘められた歴史を紐解きに、時機を見てまた訪れたいと思う。

(報告者：加藤知宏)

(6) 厳冬期山行(後烏帽子岳)

実施日 令和6年2月4日(日)

山域 南蔵王 後烏帽子岳(1681m)

行程 えぼしリゾート

トスキー場の駐車場

8:30 集合～9:20 かも

しかリフト終点～11:

30 後烏帽子岳～13:20

かもしかリフト終点～

14:10 ゴンドラ終点～

14:30 ゴンドラ乗り場

着

参加者 会員=千石信夫



▲中腹にて休憩



(C L)、細川光一(S L)、冨塚和衛、草野洋一、松元秀平、鈴田則文、鈴田泰子、準会員=八尾寛、石川弘子、ゲスト=佐藤俊幸 以上 10 名

厳冬期山行としましたが、いみじくも立春の日であったので、春山山行というべきかもしれません。

朝 8 時 30 分、えぼしリゾートスキー場の駐車場に全員集合。身支度を整えゴンドラ乗り場に行って、登山届を提出。宮城県には提出しているが、ここはスキー場独自に管理されており届

が必要となっている。下山したらチケット売り場に報告するように指示を受けた。天候は曇りで条件は悪くはない印象だった。ゴンドラからリフトを乗り継ぎ、かもしかりフト終点でワカンを履き歩きはじめる。樹林帯を縫うように右に左に進んでいく。先週の下見に歩いた状況より、幾分雪が締ってきたようで比較的歩きやすかった。先頭は細川さん、ルート上、木の枝などに赤布を付けながら進んでくれた。

ラッセル交代しながら進むにつれて、風がだんだん強くなって視界も悪くなり、山頂では暴風状態の中で記念写真を撮り



▲後烏帽子岳山頂で暴風のなか記念撮影

早々に下山した。下山途中には雲の晴れ間に青空が見え隠れし、きれいな雪景色を見ることができた。途中で昼食を摂った後、かもしかりフト終点からスキー場の脇を歩き、ゴンドラ終点からゴンドラを利用し駐車場まで下山した。

今回の参加者は、雪山デビューの人などや新しい顔ぶれのメンバーが多く参加していただき、若返りを感じる山行だった。 (報告者：千石信夫)

(7)早春山行(西吾妻山)

実施日 令和6年3月23日(土)

山 域 西吾妻山(2035m)

コース 天元台スキー場リフト終点～中大巔南側より梵天岩手前(天候不順により途中撤退)～天元台スキー場リフト終点

参加者 会員=千石信夫(L)、鈴田泰子、準会員=八尾寛、支部友=能勢真人、ゲスト=佐藤俊幸 以上5名

頑丈な木組みの雪囲いの残る米沢市内を抜けて、天元台スキー場のロープウェイ乗り場に集合した参加者は、雪深い西吾妻山に向けて活動を開始した(8:30)。ロープウェイで高度1300[㍎]地点まで上がり、3基のリフトを乗り継いで積雪420[㍎]と観測される1820[㍎]地点に降り立ち(9:15)、スキー場の一角で輪カンジキを装着して歩行を始めた(9:30)

雪氷で美しく装ったオオシラビソに囲まれた樹林帯では、先行者のトレースが比較的よく確認できた。振り返ると、樹林の向こうに飯豊連峰の山並みが見



▲鞍部 1900[㍎]地点にて(10時15分)

える。山肌の雪の白に薄墨の山巒が混ざり合い、息を呑むような遠望であった。

中大巔を巻くようにしてカモシカ展望台付近へ前進すると、梵天岩が確認できた(10:05)。3月とはいえ氷点下の気温に、厚いグロー

ブに覆われた指先がかじかむ。ときどき顔に当たる雪のつぶて、シュカブラの上を舞う風の冷たさ……。そのような気象条件にも、参加者はみな「楽しいなあ」「雪山はいいなあ」と楽しげである。

ここから天候の変化に備えて、雪中に赤布の付いた細竹の設置が開始され、緩やかな下りを経て 1900 地点の鞍部に到達した(10:15)。締まった積雪の上に新雪が重なっているためラッセル様の登り方を強いられ、梵天岩への手前で小休止した(10:50)。当初は小雪のちらつく天候であったものの、次第に降雪が強まってホワイトアウトの危険性が高まり、ここで引き返す決定がなされた(11:00)。晴天であれば梵天岩や天狗岩を越えて西吾妻山の山頂から見渡す限りの樹氷原を目にすることができたろうが、その光景を眺めるのは先々の楽しみとしよう。

強風を避けて 1860 地点まで下ったところで大休止とした(11:40)。3名が持参したスコップで雪を掘り、残る2名は圧雪に協力し、真っ白な雪のダイニングテーブルとベン



▲雪のダイニングで昼食を(11時58分)

チが出来上がった。雪の女王の宮殿に勝るとも劣らない食卓を囲み、フラッグを掲げて記念撮影した。こうして心ゆくまで雪山登山の楽しみを味わったのち、再びリフトとロープウェイを利用して天元台スキー場のロープウェイ乗り場へ戻り、再会を約して笑顔で解散した(13:30)。 (報告者：鈴木泰子)

《付記》

8月に予定した「夏山山行」は猛暑により中止した。

【公益事業山行】

(1) 第 11 回 登山教室 (北泉ヶ岳・泉ヶ岳)

実施日 令和 5 年 11 月 19 日 (日)

山 域 北泉ヶ岳 (1253m)、泉ヶ岳 (1172m)

コース オーエンス泉ヶ岳自然ふれあい館前駐車場～水神～三叉路～北泉ヶ岳
～三叉路～泉ヶ岳～(滑降コース)～お別れ峠～自然ふれあい館前駐車場

参加者 会員=冨塚和衛 (C L)、千石信夫、草野洋一、千葉正道、佐藤昭次郎、
松元秀平、準会員=八尾寛、佐藤善武、支部友=鳥田伊志、一般参加=渡辺きよ
子、阿部真美 以上 11 名

昨年に続き、秋の登山教室を仙台市民に親しまれている北泉ヶ岳・泉ヶ岳をフィールドに実施した。

集合場所のオーエンス泉ヶ岳自然ふれあい館前の駐車場に、参加者 11 名が全員集合後に自己紹介。続いてリーダーからコース及び休憩時に予定の登山教室について簡単な説明を行った。その後、各自登山支度を整え、先ずは水神を目指して出発した。

夜来の雨に泥濘^{ぬかるみ}となった緩やかな登山道を 30 分程進むと、後ろから“早い!”の声があり、歩を緩めて呼吸を整える。周囲の木々はすっかり葉を落とし冬支度のようなのだ。

1 時間ほど歩いて薄っすらと雪が積もる水神石碑に辿り着く。泉ヶ岳の山名の由来ともなっている石碑の前で記念写真を撮る。

一息入れて、北泉ヶ岳山頂を目指す。樋沢川の源頭部を右岸に渡り、北泉ヶ岳への登りに取り付く。夜来の雨は標高を上げるにつれて雪に変わったようだ。山肌は積もった雪で白さを増していく。泥濘と化した登山道は、雪の下の濡れ落ち葉と相まって歩き難い。挙げ句の果てに風も



▲水神石碑前にて



強くなってきた。ブナの原生林を吹き抜ける風が轟々と音を立てて吹き抜けていく。

悪条件の中、急坂をゆっくり、ゆっくりと足を運ぶ。泉ヶ岳への分岐点となっている三叉路に着いたのは、水神石碑から1時間ほどの行程であった。ここで大休憩を取る。

▲雪道となったルートを登っていく

休憩を利用して、1回目の「登山教室」を行う。講師は千石支部長。支部長が作成した「低体温症について考える!」と題する資料により、2023年10月6日に発生した朝日岳(那須町)での低体温症による遭難事故を題材に、低体温症に係わりのある(A)気象について、(B)ウェアについて、(C)非常用装備について、(D)行動食について、(E)非常食について、(F)緊急時の対策について等の話があり、寒風が吹きすさぶ中、参加者は熱心に耳を傾け聴講した。

三叉路から北泉ヶ岳山頂までは1時間ほどの行程だ。ブナ林の中を一旦下り泥濘を過ごしてからは、北泉ヶ岳山頂まではひと踏ん張りだ。登山道に張り出す根っ子に気を付けながら登り詰めていくと、北泉ヶ岳の山頂に辿り着いた。途中、すれ違う人や追い越していく人がいたが、山頂にも数人の登山者がいた。この山は、榎有恒氏が親しみを持って故郷の山と称しているように、仙台市民に愛され続けている山であることが頷ける。

北泉ヶ岳の山頂は風がもろだ。記念写真を撮り、早々に三叉路まで引き返す。雪の上に腰を降ろし昼食を摂る。寒い日の山での昼食にはカップラーメンが欠かせない。体が温まる。食事時間を利用して、2回目の「登山教室」を開く。講師は八尾寛準会員。「楽に登山するには」と題する資



▲北泉ヶ岳山頂にて

料を基に、登山に適した体の使い方について、(1)エネルギー補給、(2)有酸素運動、(3)速筋と遅筋の使い分けの3点から、登山時の筋肉生理学的見地上の分かりやすい解説があった。頷きながら聴講する人もあり、大変有意義な登山教室となった。



▲陽が照りだした泉ヶ岳山頂にて

30分ほど三叉路で過ごし、泉ヶ岳へと向かう。溶けだした雪の登山道を北泉ヶ岳と泉ヶ岳の鞍部まで下り、泉ヶ岳の頂へと登り返す。13時過ぎに泉ヶ岳山頂到着。山頂に立つ石碑の前で記念写真を撮る。

下山路は滑降コースにする。滑降コースは仙台市内小学校5年生の泉ヶ岳登山で登る登山道だ。会員の中には、この泉ヶ岳登山の支援ボランティアとして、オーエンス泉ヶ岳ふれあい館に登録している会員もいる。

滑降コースは急な下り坂が続く。登山道は根っ子が張り出し、石や岩が重なり合っていて歩き難く危険も伴う。慎重に急場を下る。難所の「大壁」を過ごし、見返り平まで下れば、後は心配ない。ここで一息入れる。

泉ヶ岳自然ふれあい館に着いたのは15時。全員無事の下山となった。コースタイムは休憩時間を入れて約8時間。昨年の第10回登山教室とほぼ同じコースタイムだった。今年の登山教室は、昨年の教室と比べると、一般参加者が少なかったが、この登山教室を地道に続け回数を重ねていくことは、公益法人としての使命でもある。如いては、この事業が会員増に繋がれば、それに越したことは無い。
(報告者：富塚和衛)

《付記》

「第12回親子登山教室(5月6日)」と「第13回親子登山教室(10月15日)」は中止。7月9日(日)に予定した「第11回登山教室」も諸事情により中止した。

また仙台市内の小学校が5年生対象の「泉ヶ岳登山」を実施するに際し、要請に応じて教育委員会、学校側と連携を図り、12校に支部会員が登山支援のボランティアを務めた。

2023 年度 山行事業以外の宮城支部活動記録

■全国山岳古道調査

宮城支部が担当した「栗駒古道」「出羽・仙台街道」「関山街道」「二口街道」「蔵王古道」の古道調査は、2年を費やし終了する。各担当チーフが作成した原稿テンプレートをはじめ写真、GPS、地図などを富塚和衛委員長が取りまとめ、今年1月の役員会で承認を受け本部に送った。この1年の活動は以下の通り。

□第5回山岳古道調査特別委員会(会場：仙台市シルバーセンター会議室)

期 日 令和5年8月31日(木)

出席者 富塚委員長、千石、柴崎、高橋、佐藤、遠藤、加藤、鳥山 以上8名

連休明けから夏まで、未調査箇所への調査、資料収集、協力先との打合せ期間に当たった。この委員会で各チーフより、これまでの進捗状況を報告した。この報告を受け、9月末まで原稿テンプレートの訂正箇所を富塚委員長宛にメールし、11月末までに各古道の最終テンプレートを作成、完成品にすることを確認した。(詳しくは「宮城山岳通信30号」参照)。

□第6回山岳古道調査特別委員会(会場：仙台市シルバーセンター会議室)

期 日 令和6年1月17日(水)

出席者 富塚委員長、千石、千葉、柴崎、横山、草野、佐藤、遠藤、加藤、鳥山 以上10名

1月役員会終了後に開催。富塚委員長に集約された原稿テンプレートと古道関連の写真について各チーフより説明があった。本部に送る原稿テンプレートは、最終的に本部でチェックすること。そこで各チーフより、自身はもちろん外部協力者にも見てもらいたいので、校正されたテンプレートを支部にバックしてもらいたいとの要望があった。富塚委員長は本部に伝えることにした。本部には①テンプレート、②写真とキャプション、③GPS、④手書き地図を送る。

宮城支部が担当する5つの古道の作業状況の説明と報告を受け、役員会で審議した。その結果、本部に提出することを承認した(詳しくは「宮城山岳通信31号」参照)。

■「山の天気ライブ授業」

実施日 令和5年6月17日(土)、18日(日)

参加者 1日目＝座学 37名(内一般17名)

2日目＝実学 31名(内一般16名)

ヤマテン代表の猪熊隆之天気予報士をお招きして、「山の天気ライブ授業」を令和5年6月17日(土)、18日(日)の両日、蔵王町遠刈田温泉地区を主会場に行いました。この授業は、日本山岳会創立120周年記念事業の一環として企画されている事業で、山岳気象予報士が全国で支部の求めに応じて気象講習会を行うものです。本部支部事業委員会から東北の各支部に講習会開催の打診があり、いち早く手を挙げた宮城支部がこの講習会を実施する事となりました。また、例年実施している山形支部との交流会についても山形支部との話し合いにより、この講習会と抱き合わせて行うこととしました。

《1日目：座学授業》

座学授業は蔵王町遠刈田温泉公民館の大ホールを会場に行われました。一般参加者の中には、東京や秋田など県外から遠路訪れた方も居られました。座学に先立ち千石支部長から猪熊講師の紹介を含め開会の挨拶がありました。座学は13時30分から16時30分まで約3時間に及びました。

『JAC宮城・山形支部気象講習会』と題したパワーポイントを使っての座学の概要は以下の通り。気象遭難のTOP4は、①低体温症、②落雷、③沢の増水、④突風による転滑落、他に雪崩、熱中症。これら気象遭難を防ぐには、登山前日に天気図を確認、登山中は雲や風の確認が必須。確認して気象状況を把握・理解するのに必要となる知識や情報等について、Part I「山の天気の基本」、Part II「最も恐ろしい



▲遠刈田公民館での座学授業風景

気象遭難・低体温症の事故」、Part III「落雷と局地豪雨から身を守る」、Part IV「気象遭難を防ぐ方法」の4パートに分けて詳細な解説と説明があった。

この中で、個人的に知識として持っておきたいなと思ったのは、猪熊講師が小さい頃、「雲」少年だったそうで、雲に係る講義には熱が入っていたこともあるのかも知れないが、「雲」の話。空に浮かぶ雲には色んな雲があるが、分類すると雲形は①巻雲(すじ雲)、②巻積雲(うろこ雲)、③巻層雲(うす雲)、④高積雲(ひつじ雲)、⑤高層雲(おぼろ雲)、⑥乱層雲(あま雲)、⑦層雲(きり雲)、⑧層積雲(うね雲)、⑨積雲(わた雲)、⑩積乱雲(入道雲)の10種類。今日は、どんな雲が現れるか観測するのも雲の種類を知っていれば楽しみになる。雲の中には“やる気がある雲とない雲”があるらしい。“やる気”を出している雲が積乱雲。大気が不安定で落雷や局地的豪雨に見舞われる可能性がある。雲を見て意義ある観天望気できれば登山の楽しみも倍増し、安全登山の一助となることは間違いない。

3時間に及ぶ今回の講義のまとめとして猪熊講師は、次の点を挙げた。

- (1) 天気を学ぶ理由を知る
- (2) 天気図から風向と風の強さを読み取る
- (3) 海側から風が吹く時に天気は崩れる
- (4) 低体温症が発生し易い気象条件を知る
- (5) 落雷や局地豪雨から身を守る方法を学ぶ
- (6) 引き返しポイントを設定する

最後は、「今日の講義をしっかりと復習して、安全登山を楽しみましょう！」で締めくくりとなりました。猪熊講師、有り難うございました。

《2日目：実学(フィールド)授業》

昨日の講義で得た知識を基に、2日目は観天望気で山の天気予報を実践する。午前9時に蔵王山頂レストハウスに受講者31名が集合。点呼の後、早速、授業開始。まずはレストハウス内でスケジュールの説明があり、その後、刈田嶺神社奥宮が鎮座する刈田岳山頂へと向かう。



▲お釜の上に現れた「レンズ雲」



▲熊野岳山頂で説明する猪熊氏

が姿を見せてくれたようだ。

刈田岳山頂は山頂と言うよりは、平坦な広場と言った感じだ。ここからは蔵王を代表する絶景「お釜」が指呼の間だ。その一角に、道標が立っている。突然、猪熊講師がその道標に駆け寄り、両手を挙げ「ガオー！」と吠えた。「熊」繋がり即興には参加者も大笑い・・・。

“いの熊”の即興に和んだところで、愈々、熊野岳往復の観天望気だ。右手に乳白色の水面を見せる「お釜」を見ながら、浮かぶ雲を教材に山の天気について説明を受ける。風が結構強く、マイクを使用しての説明だが、中々聞き取れない。想像をたくましくして耳をそばだてて聞き入りながら講師の後に続く。1時間30分ほどで熊野神社が鎮座する熊野岳山頂へと着いた。この地は山形県の領域だ。ここで昼食を摂り一休み。

30分ほど休憩し、参加者全員で記念写真を撮り帰路へと向かう。帰路は宮城県側の避難小屋を経由するコースを採る。避難小屋手前に遭難者供養の石碑がある。「大正7(1918)年10月23日、教諭4人が引率し151人の生徒が蔵王登山中に、大吹雪に閉じ込められ、道を見失った9人(生徒7人、教諭2人)が遭難死した痛ましい事件」。

風が少々あるものの、青空に雲が浮かぶ絶好の観天望気日和ではと勝手に思う。空を見上げると、見慣れぬ雲が漂っている。講師に聞けば「レンズ雲」との事。凸レンズのような形をしたこの雲が現れるときは、上空を非常に強い風が吹いているときで、稜線や標高が高い所では注意を要するとのこと。また、気圧の谷が接近している時に現れる雲でもあるらしく、配布された予想天気図上の秋田付近にある気圧の谷の影響だろうとの説明があった。また強風だけでなく、悪天候の兆しでもあるとのことだった。まさに好材料の雲

ここで参加者の一人である「蔵王古道の会」会員の渡辺典男氏から、遭難供



▲熊野岳山頂で参加者たちと集合写真

レストハウスに戻って、2日間の「山の天気ライブ授業」は無事終了した。講師のヤマテン代表・猪熊隆之氏には、2日間しかも長時間にわたり、お忙しい中、時間を割いて頂き本当に有り難うございました。

気象遭難は登山を愛する者にとって他人事ではありません。他山の石とせず、講義いただいた内容をしっかりと復習し、確かな知識として身に着け、気象遭難から身を守り、楽しい登山が続けられますよう精進していきたいと思います。これは私だけでなく参加者全員の思いだと思います。猪熊隆之講師、本当に有り難うございました。参加者を代表して改めて感謝申し上げます。

(報告者：冨塚和衛)

■宮城支部ビールパーティ

実施日：令和5年8月3日(木)

会場：JR名取駅前「サッポロビール園」

今年の夏は連日猛暑続きで、例年になくクーリングタイムが欲しい季節となりました。恒例の宮城支部ビールパーティの日は、最高気温 33.6 度と、8月に入って3日連続の30度超えとなった。

千石支部長の音頭で乾杯した後、しばらくは冷たい生ビールでクールダウン、ジンギスカン料理が焼けたころスタミナアップ！

ようやくノドや箸が落ち着いた頃、出席した会員、支部友より近況報告のスピーチがあった。出席者の大半が、前月のオーストリア・トレッキングに参加

したメンバーで、楽しかったトレッキングを語り合う場となり、将に“トレッキング打ち上げ会”的ビールパーティとなった。会場では早くも次回プランの話で盛り上がり、トレッキング・コースのリクエストなどが飛び交っていた。



参加者：千石信夫、千葉正道、 ▲ジンギスカンを囲みながら暑気払い
 草野洋一、富塚和衛、富塚真味子、横山哲、鳥田笑美、鳥田伊志、鳥山文蔵
 計 9 名 (報告者：鳥山文蔵)

■令和 5 年度 宮城支部年次晩餐会 5 年ぶりに開かれる

実施日：令和 5 年 12 月 17 日(日)

会 場：ホテル白萩

17 時 30 分より令和 5 年度の宮城支部年次晩餐会がホテル白萩で 5 年ぶりに開かれた。千石信夫支部長が「これまでコロナ感染などで自粛してきた晩餐会が、こうして久方ぶりに開催できました。今日は新しく入会された方も参加され、クラブライフを楽しんでください」と開会の挨拶。そのあと出席された方々より自己紹介を兼ねスピーチがあった。

各自スピーチの後、1 部として主な年間山行の活動報告に移った。はじめに



▲久しぶりの晩餐会で高らかに乾杯

千葉正道会員が夏のオーストリア・チロル・トレッキングをパワーポイントで報告。終了後、飲食タイムとなり、佐藤昭次郎会員が「久々の晩餐会に新しい会員が集まり、宮城支部を盛り上げていきましょう！」と乾杯、引き続き食べながら飲みながらの報告会と

なる。

2番手は八尾寛準会員が令和5年を振り返り早池峰、梅海新道縦走、南八ヶ岳、そして9月の谷川連峰縦走までを報告。3番手は渡邊典男準会員が、仙台三高山の会OBと一緒にロールワリン山群にあるドルマカン峰(6332m)に挑み登頂した遠征を。しんがり



▲渡邊会員がヒマラヤ遠征を報告

は冨塚和衛会員が熊野古道巡拝の旅について、それぞれ報告した。その都度、報告会員への質問も飛びだし、有意義な報告会となる。

最後は晚餐会恒例のオークションとなり、出席会員はじめ、都合により欠席した会員が出品した想いの品々をオークションにかけた。掛け声が飛びかって落札された金額は合計18,100円となる。尚、今年永年会員となった千石支部長より、顕彰記念のネームタグが参加者全員にプレゼントされた。

閉会にあたり千葉副支部長が「久しぶりの晚餐会、盛り上がりました。来年に向け体力をつけましょう」と締めめの挨拶で終了した。会場の外に出ると初積雪の雪景色に変わり、雪が降りしきる中、足下に気をつけながら散会した。

〈出席者〉千石信夫、千葉正道、冨塚和衛、横山哲、草野洋一、細川光一、佐藤昭次郎、鳥田笑美、冨塚眞味子、鈴田則文、鈴田泰子、加藤知宏、松元秀平、渡邊典男、八尾寛、鳥田伊志、千石裕子、鳥山文蔵 計18名

(報告者：鳥山文蔵)

2023 年度 宮城支部以外の行事参加記録

(1) 第 7 回山形・宮城支部交流会

実施日 令和 5 年 6 月 17 日(土)、18 日(日)

会 場 遠刈田温泉「アクティブ・リゾート宮城蔵王」

参加者 山形支部＝鈴木理夫支部長、日向稔也、野堀嘉裕、小林政志、丹野
浩之 5 名

宮城支部＝千石信夫支部長、高橋二義、草野洋一、千葉正道、冨塚和衛、
細川光一、八尾寛、鳥田伊志、山田孝司、白幡みち子 10 名
計 15 名

第 7 回目となる「山形・宮城支部交流会」を「山の天気ライブ授業」に合わせ
て行いました。この交流会は、平成 27 年 6 月に『山の日』施行を控え、両支
部間の親睦交流登山として、多くの両支部会員及び一般登山愛好家が参加でき
るよう企画された。そして『山の日』の合同記念事業として発足した交流会は、
両支部間の交流を深める目的で実施されることになった。因みに――

第 1 回：宮城支部＝2015 年 8 月：禿岳

第 2 回：山形支部＝2016 年 6 月：麻耶山

第 3 回：宮城支部＝2017 年 8 月：南蔵王

第 4 回：山形支部(兼第 34 回東北・北海道地区集会)＝2018 年 10 月：出羽三山

第 5 回：宮城支部(兼第 35 回東北・北海道地区集会)＝2019 年 10 月：太白山

第 6 回：山形支部＝2022 年 7 月：蔵王山



▲宮城・山形両支部の参加者で記念写真

と、計 6 回開催されてきました。
ただし、2020 年度と 2021 年度は
コロナ感染拡大の影響で開催が中
止となっています。

この度の 7 回目の交流会は変則
的ではありますが、日本山岳会
120 周年記念事業の一環として行
う「山の天気ライブ授業」と抱き
合わせで実施しました。具体的に

は、ライブ授業は2日間にわたって行われることから、この授業に参加した両支部の会員等が宿泊先のホテルで宴会形式の意見交換の形で行うことにしました。両支部総勢15名が宴会場に集い、両支部交流会は、千石支部長の開会の挨拶で幕を開けました。ひな壇には千石宮城支部長、鈴木山形支部長、小林政志山形支部会友(前々日本山岳会会長)、猪熊ヤマテン代表(山の天気ライブ授業講師)の豪華な面々が鎮座、お酒がノドを潤したところで、参加者全員による3分間のスピーチ。いろいろなお話が披露されましたが、特に日焼けしたお顔の小林山形支部会友が、家庭菜園を悪戦苦闘しながら楽しんでいる旨のお話には、多くの方が耳を傾けていました。また小林会友と講師の猪熊氏は大学山岳部の先輩後輩でもあり、宴会場は大いに盛り上がりました。古道調査の進捗状況についても情報交換を行い、次年度は山形支部担当で交流会を開催することを確認し、鈴木山形支部長の閉会の辞により第7回山形・宮城支部交流会は盛会裏に終了しました。(報告者：富塚和衛)

(2) 第36回 東北・北海道地区集会、青森支部創立30周年記念集会

実施日 令和5年7月1日(土)～2日(日)

会場 青森県八戸市「八戸プラザホテル」

令和元年に宮城支部で開催した東北・北海道地区集会の後、コロナ禍の影響で開催が閉ざされてきましたが、規制解除を受けて青森支部設立30周年記念集会を兼ね、八戸市内にある八戸プラザホテルで盛大に開催された。参加者は全国から130名を超え、盛況のうちに終えた。

初日の午後に集合し、まず東北5県と北海道の支部長会議が開催された。初対面の支部長もおり、各自、自己紹介など行ったあと議題に入った。2024年、25年の開催地の調整を行い、24年は福島支部、25年は北海道支部ということで承認された。開催時期については未だ決まっていないので、担当支部から決まり次第通知することとなった。その他、各支部からの情報交換などを行い閉会した。

午後3時から青森支部創立記念式典が開催された。須々田秀美支部長の挨拶のあと、前支部長の中村勉氏から「青森支部30年のあゆみ」を時系列に、また、白神山地ブナ林再生事業活動など創立当初のエピソードなどの説明があった。

その後、新会長の橋本しをり氏より新任の挨拶を兼ねた祝辞と続き、記念講演は八戸の是川縄文館館長・古舘光治氏から、八戸の風土と歴史について「縄文・古代(戸の話)・根城南部氏。八戸藩、種差など」のテーマであった。八戸の知られざる歴史を垣間見ることができた。

懇親会では、前会長の古野淳氏はじめ首都圏からの参加者も多く、遠くは北九州支部などからも参集、全国的な交流が行われた。須々田支部長の挨拶に始まり、懇親会はさながら全国支部懇談会の様相を呈した。恒例の各支部思いもいの余興も始まり座は大いに盛り上がった。余興に続き、その他の団体の紹介、アルパイン・スキークラブ、アルピニズムクラブなどが壇上にあがり祝辞を述べていた。宮城支部も鳥田笑美さんのリードで“大漁唄い込み”を歌い、何とか盛り上げることができた。

翌2日は、八戸の有名な館鼻岸壁朝市に出向き、見学しながら各自朝食を摂った。その後、Aコース(階上岳)とBコース(蕪島・種差海岸散策)に分かれて移動し、それぞれに記念山行を楽しんだ。階上岳グループでは山頂で昼食、全員集合し記念写真を撮り下山。その後、ホテルに帰還し流れ解散となった。

《参考資料：「東北・北海道地区集会」の過去、宮城支部担当年》

第2回 1983(昭和58)年・・・金華山 ※1985(昭和60)年に本会創立80周年記念山行を宮城支部が担当し、神室山で開催

第7回 1989(平成元)年・・・船形山

第11回 1994(平成6)年・・・七ッ森

第18回 2001(平成13)年・・・大東岳

第25回 2008(平成20)年・・・泉ヶ岳 兼宮城支部設立50周年記念山行

第28回 2011(平成23)年・・・栗駒山 兼第27回全国支部懇談会

第35回 2019(令和元)年・・・蔵王(蔵王古道)

と、過去7回担当している。

〈宮城支部からの参加者〉

千石信夫、千葉正道、富塚和衛、富塚真味子、草野洋一、細川光一、横山哲、

鳥田笑美、鳥田伊志 9名

(報告者：千石信夫)

(3) 第 36 回日本山岳会全国支部懇談会

実施日 令和 5 年 9 月 23 日(土)・24 日(日)

会場 群馬県・水上温泉ホテル「坐山みなかみ」

群馬支部主催による第 36 回となる全国支部懇談会が谷川岳のお膝元である、みなかみ町のホテル「坐山みなかみ」(旧水上館)を会場に開催された。前年度は宮崎支部主催による宮崎市青島での開催が計画されていたが、コロナ禍の影響で中止を余儀なくされ、今回の支部懇談会は、2019 年に奥日光の光徳温泉で栃木支部主催以来の実に 4 年ぶりの開催となった。参加者は本部役員をはじめ全国から約 160 人の会員、準会員等が集った。

9 月 23 日(土)の初日は、15 時から受付があり、16 時 30 分から講演会(16:30~17:30)で幕を切った。「今、谷川岳で考える安全登山」と題し、群馬県警谷川岳警備隊長の伊藤武氏(平成 9 年度から通算 18 年間、警備隊で山岳遭難者の救出や遭難防止活動の任務に当たると)が講師を務められた。



▲講師を務めた谷川岳警備隊長の伊藤武氏

以下は講演概要——「管内には日本 100 名山が 5 座(谷川岳、巻機山、平ヶ岳、至仏山、武尊山)、隣県近場に 4 座(燧ヶ岳、日光白根山、赤城山、皇海山)あり、登山者が多数訪れるエリア。群馬県内の山岳遭難発生件数は増加傾向であるも、谷川岳のマチガ沢や一ノ倉沢の遭難事故は減少傾向。危ない場所での事故は起こりづらいが、“よもや”と言う場所での事故が起き、死亡事故も。バックカントリーでの事故も増加傾向。尾瀬の遭難例ではサンダルやスニーカー履きも。また断定できないが、ヘッドライト持参も使い方が分からない例もあった。通常は若手警察官の救助・応急処置訓練をはじめ、消防との協力強化策など行っている」との話があった。最後に群馬県警山岳遭難対策用ドローンのクラウドファンディングについての説明で幕を閉じた。

講演会終了後、1 時間の自由時間があり、18 時 30 分から恒例の懇親会が開催

された。開会宣言後、アトラクションとして勇壮な「三国太鼓」が披露された。

続いて、根井康雄群馬支部長から「歓迎の言葉」のあと、橋本しをり日本山岳



会会長、阿部賢一みなかみ町長よりご挨拶があり、桐生恒治日本山岳会副会長の乾杯のご発声で懇親会は幕を明けた。

懇親会では全国の支部から寄せられた日本酒が用意され、飲み比べに挑む^{つわもの}兵も現れた。宮城支部から参

▲挨拶する根井群馬支部長(右は橋本会長) 加した2名の席の真向かいに

偶然、元日本山岳会副会長の廣重恒夫さんが座られており、一献傾けさせて頂いた。その折り、廣重さんがチーフを務められている日本山岳会120周年記念事業の一つGHT(グレート・ヒマラヤ・トラバース)について、お話をお聞きすることが出来た。

宴は、日本山岳会支部事業委員会の宮崎紘一委員長による一のメがあり、二のメを次期開催支部である神奈川支部の込田伸夫支部長から「三浦アルプス」で開催する旨の話があり、幕が下ろされた。

9月24日(日)の2日目は、先ずは2班に分かれてビュッフエスタイルの朝食を摂る。その後、バスで谷川岳インフォメーション・センターへ移動し、ハイキングを楽しむ。ハイキング・コースは谷川岳インフォメーションから一ノ倉沢出合までの国道291号線を往復。コースタイムは約3時間。センターを9時頃に出発する。谷川岳ロープウェイ駅、谷川岳山岳史料



▲マチガ沢出合で八尾さん(左)と富塚さん(右)

館を過ぎると緩やかな道となる。西黒尾根、巖剛新道の取り付きを左に見て行くとマチガ沢出合に到着。ここで一休み。

マチガ沢から一ノ倉沢出合までは 30 分程。途中、越後の国へと通じる清水峠道の国道開削時の苔むす石垣が道の山際に見られ、往事を偲ぶことが出来た。



一ノ倉沢出合で大休憩。備え付けの双眼鏡を覗くと、一ノ倉沢を登攀する 2 名の人影が見られた。劔岳、穂高岳と並ぶ日本三大岩場のひとつで、“魔の山”と称される幾多のアルピニストの命を奪った谷川岳の東壁、一ノ倉沢は迫力満点だ。切立つ絶壁は今なお

▲一ノ倉沢をバックに記念写真
アルピニスト達の憧れの的なのだろう。そんな一ノ倉沢をバックに記念撮影。

30 分程滞在し、帰路についた。途中、電気自動車とすれ違う。電気自動車には数人の観光客が乗っていた。谷川岳インフォメーション・センターには 12 時頃到着。お弁当を渡され、第 36 回の支部懇談会は終了した。

〈参加者〉 富塚和衛、八尾寛

（報告者：富塚和衛）

(4) 2023 年度 日本山岳会自然保護全国集会

実施日 令和 5 年 10 月 21 日(土)・22 日(日)

会場 八王子市高尾町「タカオネ」

4 年ぶりの自然保護全国集会が高尾山で催され、宮城支部から高橋二義さんと私が出席した。会場は高尾山口の駅の真向かいにある「タカオネ」、『人と森とのかかわり』がテーマである。

主催者の開会の挨拶につづいて“森の哲学者”を自認する内山節さんの基調講演を 2 時間ほど伺った。30 年ほど前になるが、仙台の「蕃山 21 の会」の総会に来られて記念講演をされた折、お会いしたことがあったが、当時の若く元気なお姿や言説にかえて、さらなるご経験と思慮を深められた森と人との共生のお話しは重みがあった。

その後、全国 8 支部と本部の報告に加え 5 支部から紙上報告、さらに「高尾の森づくり会」から植生復元事業の詳しい報告があった。

宮城支部からは、ここ数年調査や検討を進めてきた風力発電事業について、「宮城県の山地および丘陵における風力発電事業計画の概要について」と題して、高橋二義さんに発表していただいた。この折あらためて作った資料、20 箇所にもわたる事業計画の位置と現況について示した図表は、東北の一つの県においてさえも、激しい風力発電事業に晒されていることを明瞭に示す資料として、出席の皆様を受け止められたようだ。また、支部の一昨年 8 月のアピール文も別添で配布された。

夕方からは、駅舎の一角にあるレストランでイタリア料理をいただきながらの懇親会が催された。その途中、多摩支部の長老・河野悠二さんにつづいて、私にも挨拶の役が回ってきた。私はこの二十数年、ほとんどの全国集會に出席させていただいてきた。そこで学んだことや「木の目・草の芽」で学ばせていただいたことが、山での自然保護への大いなる指針になってきたことを、この席にいらしている菅^{みづ}ての自然保護委員長で山岳会の自然保護の歴史をまとめられた富澤克禮さんへの感謝も込めて披露し、山岳会の歩んできた自然保護の歴史を私たちが如何に学んでいくかが大切であることを述べ、この席におられた皆さんの大いなる賛同をいただくことになった。その後、会場を「タカオネ」の中庭に移してファイヤーを囲んでの楽しい宴となった。山梨支部差入れの特別なワインも味わった。

翌 22 日はフィールドワーク。高尾駅に出て小仏峠に向かうバスを日影で降り、小下沢に沿う林道を辿り、ほぼ中流に位置する日本山岳会の「高尾の森作業小屋」に入った。作業小屋といっても立派な山小屋である。ここから数班に分かれて、小下山東面で進められてい



▲日本山岳会 高尾の森作業小屋(小下沢)

る広葉樹による植生復元事業の現場を見学させていただいた。このあたりは高尾山に続く景信山(727.3m)の北東面にあたり、岩屑地の急斜面である。そこに



は 019 年の台風による崩落地が各所に見られて、よくもこんな場所に植えてつづけてきたものだと感心させられるとともに、「高尾の森づくりの会」の皆様の御苦勞のほどが偲ばれた。

午後は、小下沢左岸の

▲防鹿対策をした広葉樹植林試験地(東京都林) 東京都の植栽地を廻った。鹿の食害防止のための対策が講ぜられている植栽地である。防鹿柵と言えば宮城県では金華山の金網で囲ったブナ幼木対策が挙げられるが、高尾では苗木を食害から保護するために、特別なプラスチックの被覆材が開発され試験されていた。この被覆材は、太陽光を適度に透過させて樹木の生長を促すとともに、食害を徹底的に無くす効果をもたせている。まだ試験段階だが、どんな結果になるか期待される。

今回の自然保護全国集会は、コロナ明けの 4 年ぶりの大会であったにもかかわらず、例年と変わりなく、否、例年以上に興味深く有意義なひとときを過ごせた大会であった。支部の参加が少なかったのは残念だが、それを多摩支部の方々と「高尾の森づくりの会」の方々とが大挙して加わり、補ってくれたように思うし、その皆様がさまざまな工夫を凝らして接待してくれていたのだと思う。

困難を押しして自然保護活動を継続していくことの大切さを、再び教えていただいた大会として、下野綾子委員長や自然保護委員の皆様の御努力に深く感謝したいと思う。 〈参加者〉柴崎 徹、高橋二義

(報告者：宮城支部自然保護委員会委員長 柴崎 徹)

(5) 令和 5 年度 支部連絡会議

5 月 22 日、6 月 20 日(総会前)、9 月 21 日、12 月 2 日(年次晩餐会前)、3 月

28日に開催された。5月、9月、3月はZOOM会議で行われ、千石支部長と冨塚事務局長が参加した。

紀行・随筆およびエッセー

憧れの裏岩手縦走

八尾 寛

第1日(2022年7月16日)

天気予報では梅雨前線が復活し、東北全域で大雨の^{おそ}惧れありとのことだった。山の上の天気が気がかりだが、とにかく八幡平の陵雲荘まで行ってみよう。黒谷地のバス停で降りると、いきなりニッコウキスゲのお出迎えである。ニッコウキスゲの花をかき分けながら木道を進むと、右手に熊の泉が見えた。陵雲荘付近に水場がないので、ここで給水しよう。^と樋を伝ってとうとうと流れ落ちる冷たい水をペットボトルに詰めた。約3^とリをザックに入れて背負うと、ズッシリと重い。晴れていれば、広々とした黒谷地湿原が見渡せるのだろうが、今日は霧に覆われ、何も見えない。ほどなく源太森の頂上に着いたが、やはり霧に覆われて見晴らしがきかない。

湿原に降りると雨が降り始めた。八幡沼周回コースを合わせると、左手に八幡沼が見えた。霧の中に陵雲荘がぼんやり浮かんでいる。陵雲荘の中へ入ると、10人ぐらいの登山者で混雑していた。雨を避けて昼食を摂っているらしい。さらに10人ぐらいの登山者がなだれ



▲霧の中に立つ八幡平陵雲荘

込んできて、立錐の余地もない。「ここで昼食にします」と、ガイドとおぼしき人の合図で立ったまま、おにぎりや菓子パンを頬張り始めた。「東京からのツアーです。明日は早池峰へ行く予定です」「天気が回復するといいですね」。30分ほどで全員退出し、自分一人になった。“今晚は一人だけかな・・・”。

夕方になると霧が晴れ、八幡沼の水面が見えてきた。外へ出ると雨も上がっているようだ。16時10分、八幡平^{はちまんたい}頂上に到着し展望台に上った。霧の中にア

オモリトドマツのシルエットが写っている。陵雲荘に戻り晩飯を済ませると、さらに霧が晴れ、まだまだ明るい。外へ出ると湿原が広々と見渡せられる。ニッコウキスゲとコバイケイソウが花盛りだ。緑をバックに黄色と白のコントラストが鮮やかである。あのなだらかな丘が源太森だろうか……。木道を辿り八幡沼から流れ出る小川のあたりまで行き、引き返してくると大きなザックを背負った2人組がやってくるのに出会った。

夜中に寝ていると、下の方で2人組が料理し始めた様子である。ところが次々といろいろな料理を作り、モリモリ食べているみたいだ。果ては天ぷらかフライのように油が跳ねる音、缶ビールも開けている。食べ終わったなと思ったら大きなイビキ。登山というよりは、山小屋に食べに来たのだ。あの大きなザックの中身は食材だったのだ。

木道はニッコウキスゲ分けていく いつしか裾は花に濡れけり

雨避けて人なだれ込む避難小屋 無言で食べて潮引き去りぬ

吾れ一人 小屋に佇む夕暮れに 湖見えて雨止むを知る

第2日(7月17日)

陵雲荘を5時15分に出発した。雨は降っていないし霧も深くない。八幡沼周回コースを歩くと、朝開いたばかりのニッコウキスゲがみずみずしい。ちょうどコバイケイソウが花盛りの季節だ。こんなに美しいコバイケイソウを見たのは初めてだ。雨が降り出したのでレインウェアを着用し、樹海ラインの車道をしばらく歩き、いよいよ裏岩手縦走路に入った。反対側から若い男女2人組がやってきた。途中から引き返してきたに違いない。自分自身も進むべきか迷い



ながら歩いた。とにかく前進あるのみだ。雨の中もまた楽し。

7時20分、諸檜岳(1516m)到着。このあたりから前諸檜にかけては平坦で、丈の低い木々の間を進んで行く気持ちの良い道だ。森の中にはギンリョウソウがたくさん生えている。

▲大深山荘水場に広がるお花畠

7時55分、石沼に出た。名前の通り、広い沼の中に石が点在している。浅瀬にはミツガシワが群生している。前諸檜からは左右に切れ落ちた痩せ尾根を進んでいく。晴れていれば左手に岩手山が見えるに違いないが、今日は見えない。前方に鋭く尖^{とが}った岩峰がぼんやり見えてきた。

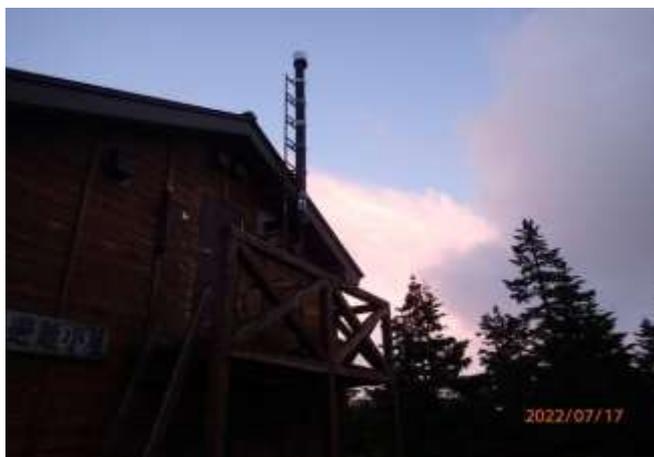
8時58分、嶮^{けん}岨^{そもり}森(1448m)到着。雨はいつの間にか止んでいる。霧が晴れ眼下に鏡沼が見えた。レインウェアを脱いで小休止した。

10時ごろ、大^{おお}深^{ふか}山^か荘に到着し昼食を摂った。新しくきれいな避難小屋である。ここで給水しておこう。松川温泉方面へ下っていくと、コバイケイソウとニッコウキスゲが競い咲く美しい谷に出た。水場はそこにあり、冷たい水が勢いよく湧き出ていた。ザックは、また重くなった。ここから登山返しを繰り返しながら三ツ石山荘まで約6.3km、かなりハードだ。

11時10分、大^{おお}深^{ふか}岳^{だけ}(1541m)に到着。下りで熊のようにたくましい青年に出会った。「どちらからですか?」「関東森から来ました。きのうは八瀬森山荘で泊まりました」。青年の顔の周りを虫が数匹飛び回っている。11時22分、八瀬森分岐。さっき出会った猛者は、向こうからやって来たのだな。この岩手・秋田県境ルートは、自分にとっても憧れの秘境である。

険しい道をジグザグに登り返し、12時8分、小^こ畚^{もつこ}山(1467m)に到着した。吹き抜ける風が冷たく強い。しかし、ここから比較的楽な道を進み、1447.9^mの三角点を過ぎると12時47分、池沼の点在する広々とした高原に出た。三ツ沼である。さらに進むと前方、霧の中にぼんやりと大きな岩が見えてきた。三ツ石山の頂上は間近である。二つ並んだ大岩を左に見上げながら通り、右手奥のピラミッド型の岩を見送ると13時18分、三ツ石山山頂(1466m)である。

霧が晴れ、岩手山とその手前の山々が目の前に聳^{そび}え、その下に山小屋が見えた。ご褒美の一瞬である。ガラガラ、



▲三ツ石山荘の夕暮れ

ドロドロの難路を下ると、ニッコウキスゲの咲く湿原の中に三ツ石山荘があった。素敵な小屋である。14時に到着、今晚の泊まりは自分一人だろうか。コーヒ一片手にテラスから眺める三ツ石山や大松倉山(1407.6m)が美しい。夕食を済ませ外に出ると、茜色に染まった雲が美しい。そして、星が瞬き始めた。素晴らしい一日が暮れていく。

霧の中 花ぞ盛へる谷へ下り 明日の旅路の水を求めん

雨上がり 青空覗く岩手山 山小屋抱き吾を迎えん

山小屋の小窓を照らす月明かり おぼろに見えて雲に隠れり

第3日(7月18日)

5時2分、大松倉山の裾あたりだろうか、霧の中からの日の出を拝んだ。5時55分、出発。滝ノ上温泉方面へ下り始めると、間もなく右手に水場が見えた。水量は少なく、ポトリ、ポトリとしたたり落ちる水を下の容器にため、柄杓で掬って採るらしい。網張温泉ルートに分け、さらに下ると展望が開け、葛根田川の地熱発電所や秋田駒ヶ岳から乳頭山に至る山塊が、聳え立っているのが見渡された。“あそこまで下りで登り返すのか”と、闘志がムラムラと燃えてくる。

どんどん下るとブナの森に入った。不意に前方10メートルぐらい先に体長50センチぐらいの子熊がいて、登山道脇の木にスルスルと登って姿を消した。その間、2、3分だろうか。近くに母熊がいるかもしれない。緊張が走った。

8時40分、葛根田川にかかる橋を渡り、烏帽子岳(乳頭山)登山口に着いた。



▲乳頭山に至る楽園の道

ここから乳頭山まで標高差約800メートルである。ひと息入れ、急な斜面をどんどん登る。背中に陽を受け暑い。

10時17分、白沼に出た。森の静寂を破り蛙の音がする。どんどん登っていくと、登山道脇で弁当を広げている人がいた。「登りですか？ 下りですか？」「下草刈りだあ」との返事。子熊に出会った話

をすると、「こんくらいかあ?」。「そうそう、それぐらいの大きさです」。「一歳児だな」と教えてくれた。子熊は生まれて2年目の夏に親離れし、単独で行動するそうだ。ほとんどの子熊は次の冬を越せず、森の奥でひっそりと死んでしまうのだろう。20分ほど登れば休憩によい場所があると教えてもらった

ので、そこを目指し、さらに急斜面をよじ登った。

するとパッと開けた明るい湿原に出た。キンコウカの群落が美しい。11時ごろ木道脇のベンチで昼食。モウセンゴケが群生している。捕まっている虫がいるのに気づき、よく見ると赤くなる前のアキアカネらしい。もはや動けなくなっていて、あきらめの表情だ。

11時57分、ようやく森林限界に出た。高山植物に覆われ広々とした緩やかな斜面をどんどん登る。丸い山の裾を巻いたところで、正面にピラミッド型の山頂がようやく見えた。乳頭山である。振り返ると、大きく裾野を広げた岩手山や三ツ石山が見えた。ニッコウキスゲやヨツバシオガマなどが咲き誇る登山道を進むと、正面の乳頭山がだんだん大きくなる。一旦、小さな湿原に下り登り返す。クライマックスが近づいているという安堵感と、この樂園をもっと堪能したいというジレンマがある。

秋田駒ヶ岳からの縦走路と合流し13時7分、乳頭山頂上(1478m)に到着した。しかし山頂は霧に包まれ、強い風が吹き抜けていた。午後から天候が変わったようだ。黒湯への下り道は、以前より荒れている。火山ガスの匂いがする一本松温泉の野天風呂



▲黒湯源泉

をパスし、先達川に出た。川に沿って歩くと、黒湯の建物が見えてきた。フロントで若女将らしき人が「ちょうど空いているお部屋があります。料理もお出しできますが、いかががされますか?」。別棟の玄関で秋田犬のぬいぐるみが出迎えてくれた。温泉に浸かり、身も心もさっぱりした。夕方になり、雨が降り出した。

木に登り人に怯える熊の仔よ 母を求めて彷徨^{さまよ}ひけりな

訪れる人よもあらし 山の沼木々のざわめきモリアオガエル
水辺なるモウセンゴケに捕へられ 蜻蛉^{とんぼ}静かに草になるらん
延々と辿る高原花の道 あれが^{いただき}頂 徐々に大きく
聞こゆるは 屋根打つ音かせせらぎか 吾が身溶けゆく白き湯の中

新会員・新準会員・新支部友 自己紹介

山には文字から入った

石川弘子

山には文字から入った――。

高校生の頃、憧れの人がワンゲル部の部長だった。ワンゲル部に入る勇気もなく、ワンゲルより好きなことがあったこともあって、実際に山に行くことはなかった。ただ、憧れの人が魅了される「山」のことは知りたいと思った。

学校の帰り道、神保町の書店で山コーナーを覗いてみた。河出書房新社の自然読本『山』、本多勝一『憧憬のヒマラヤ』、今井通子『縦走 ダウラギリⅡ・Ⅲ・Ⅴ峰』、『私のヒマラヤ』、植村直己『青春を山に賭けて』、長谷川恒男『岩壁よ、おはよう』、新田次郎の小説の数々。山が土ではなく、「岩」でできていることに初めて気づいた。

神田の書店街には格安の古本があった。エドモンド・ヒラリー『わがエヴェレスト』、ガストン・レビュファ『星と嵐』、フリゾン・ロッシュ『ザイルのトップ』、加藤文太郎『単獨行』。手の届かない世界がそこにはあった。

書店が開催する“山フェア”で槍ヶ岳の大きな写真を見た時は、なんだか心臓がギュッと締め付けられた。槍ヶ岳と剣岳とカンチェンジュンガのポスターを買った。壁に貼って眺めていると、やはり胸がキュッとした。こんな景色を見てみたいと思ったが、遠い世界の話だった。

山と溪谷社のフラワーカレンダーも毎年買った。平地では見られない高山の花々が珍しかった。「お花畑」という可愛らしい名称に微笑んだが、高山植物を実際に見たことはもちろんなかった。

図書館にも通った。冠松次郎『黒部峡谷』、板倉勝宣『山と雪の日記』、上田哲農『日翳の山 ひなたの山』、大島亮吉『山 研究と随想』、三田幸夫『山な

みはるかに』、辻村伊助『スイス日記』、武田久吉『明治の山旅』、今西錦司『山岳省察』、芳野満彦『山靴の音』、田淵行男『黄色いテント』。読めば読むほど、山は難しく、遠くなった。

けれど大学に入学した時、山岳部に入ろうと一大決心をした。山岳部の部室の前を行ったり来たりして、なかなか入れないでいたが、ようやく“エイッ”と入って「入部したいのですが？」と言うと、「女の子は入れないんだ」と瞬殺されてしまった。

気が抜けてしまったところに、探検部の人から「うちの部に入らない？」と言われ、話を聞きに行った。アマゾンの密林やロシアの雪原などにも行くが、秘境の山にも登るらしい。“植村直己風だな、それも面白そうだ”と思って入部しようと思ったら、「女の子はマネージャーで、現地には行かないよ」と言われ、今度はこっちがサッサと出てきた。当時の男女区別(≠差別)はそんなものだった。

結局、仕事仲間に誘われて山に行くようになったのは、それから20年後だった。さらにそれから20年して日本山岳会に入った。山岳部の入部を断られてから40年の月日が経っ



▲書棚に並ぶ「文字から入った山の本」の数々

ている。あのとき読んだ本の数々は、今でも私の書棚に並んでいる(上写真)。還暦を目前にした今さらながらの入会を、笑って見ているに違いない。

山の魅力と多様性

鈴田則文

日々、仙台駅前のアウトドアショップで登山の案内をしています。様々なお客様が訪れる中で場所柄、ビジネスマン、高校や大学の山岳部、百貨店に買い物に来たついでの主婦、そして登山愛好家のベテランの方が多いです。ショッ

ピングモールのような複合施設の店舗などと異なり、目的を持って来店される方がほとんどです。

店内でお話しをする中で、お客様の登山の種類や行く先について尋ねることがあります。「初心者です」、「低山にしか行きません」、「日帰り登山しかしません」、「冬は登りません」といった謙虚で慎ましい回答が多く返ってきます。でも登山に優劣の差はありません。登山歴の長い人が偉いわけではないし、標高で山のランクが決まったり、宿泊登山が日帰りより偉いわけでもありません。それぞれに良さがあります。一般的な格付けを気にせず、自信を持って自分の登山スタイルを楽しむことが大切だと思っています。

最近の傾向としては、コロナ禍の影響で北アルプスなどへの遠征が増え、為替の影響にも関わらず海外へ行く人が増えました。以前は、「いつかは〇〇に」と言った遠い先の目標を持つ人が多かったですが、今は行きたいと思ったときにすぐ行動に移す人が増えているように感じます。将来が見通せない中でも多くの人々はより活動的で、その姿勢に学びたいと思います。

コロナ後の今は海外からの旅行者も増え、特に台湾からの方が目立っています。かつてのような“爆買い”の時代は終わり、事前に十分な下調べをして、必要なものだけを慎重に選ぶ様子が目立ちます。以前はインバウンドの方に対して少し距離を置いて敬遠気味でしたが、今では同じ山を楽しむ仲間として友



好的に接したいと心から思っています。日本の山にしか興味がなかった私ですが、最近では台湾の山にも興味を持ち始め、機会があれば登ってみたいと思うようになりました。

山は、私たちみんなをつなぐ素晴らしい場所であり、ともに感動し、冒険し、成長することで、新たな交流が生まれることを楽しみにしています。

印象深いエピソードとして、ある日、海外から訪れた子連れのママがTシャツを探していました。最初は普段着をお探

しのものでしょうか、その後のお話から実はかなりの登山好きで、彼女は自身のワードローブに新しいアイテムが加わったことを心から喜んでいることがわかりました。彼女がお店を後にする際の笑顔が小さな幸せを感じさせ、周囲を明るくさせました。

最後に、仲間との時間を大切に、笑顔で共に楽しんでいきたいです。山で築いた絆が日常を豊かにしてくれることを楽しみにしています。これからも山岳会の仲間と素晴らしい山の世界を共有できることに感謝します。

山々にいざなわれて・・・

鈴田 泰子

ふと遠くへ目をやると、そこにはいつも山の姿がありました。幼い私の手をひいて「あれが泉ヶ岳、おとなりは北泉ヶ岳、あそこまで登るのはたいへんだね」「あの白いのは大東岳、まるで白い壁を立てかけたみたいだね」などと語りかけてくれた父や母の声がいまも耳に残っています。ランドセルを揺らして通った小学校の校歌も「泉ヶ岳の影さわやかに」という歌い出しです。秋の夕暮れにくっきり浮かび上がる黒々とした山影、うっすらと雪化粧した山並み、春には薄くきな粉をまぶしたようにけふる里山の風情、そのような風土に取り巻かれて育った私です。

幼時より宮城県で育ちましたので、小学生のときには子供会の夏の行事で、泉ヶ岳のもっとも易しい水神コースを歩いたことがあります。途中で疲れて半泣きになって、引率者である町内のオジさんに「なんだ、だらしないなあ」と笑われて、手を引っ張ってもらったのも忘れられない思い出です。

中学校を終えて女子高校に進学すると、一年生全員が蔵王縦走へ連れて行かれ、慣れないキャラバンシューズを履いて仲間と歩き続けたのを覚えています。どこから登り始めて、どこまで歩いたのか、記憶の中の景色はおぼろげですが、山々はいつもこうして、私を呼び寄せてくれました。

大学を卒業して都会へ働きに出ていた年月のあいだ、しばらく山から遠ざかっていたようにも思われますが、幸いにして自然や野生動物が大好きな夫とめぐり会いました。私の故郷である仙台に住まいを定めてからは、ふたたび山に親しむ暮らしをしています。朝な夕なに眺める泉ヶ岳や北泉ヶ岳はもちろん、

折々の季節に七ツ森や達居森や薬菜山などの里山を歩き、山野草や紅葉を楽しみに東北各地の豊かな山々をめぐり、ときには八ヶ岳や立山へ足を伸ばして、愛らしいオコジョやライチョウなどの野生動物に出会ったりするのも人生のまたとない楽しみです。

近年、夫と私は特定非営利活動法人「森の学校」という小さな組織をつくり、子供たちやその親たちとともに自然体験活動を実践しています。はじめは近郊の自然公園や里山を歩くことから始まったこの活動に、何年も継続して参加してくれる仲間ができたおかげで、今では仙台神室や栗駒山や蔵王山などで、少し距離の長いトレッキングにもチャレンジできるようになりました。子供たちが生き生きと山道を歩いたり、冬場の山麓で雪まみれになって遊ぶ様子を眺めていると、未来のアルピニストの姿が想像できるようで、微笑ましく頼もしい気持ちで同道しています。

このたび、日本山岳会宮城支部で支部長をお務めになっていらっしゃいます永年会員の千石信夫氏がお声がけ下さり、夫とともに新会員としてお認めいただくご縁を得ることとなりました。本会が高邁な理念と高い技術をもって山岳を愛するアルピニストの皆様のソサエティであることは、かねてより存じておりましたので、こうして末席に加えて頂くのはこの上ない喜びです。大先輩方から登山への取り組み方を丁寧に教えて頂けるようになったことで、自分自身の山への向き合い方が少しずつ変化しているようにも思われます。

たとえば雪山に入るとき、これまで私は先行者の付けていったトレースや赤布に頼って歩もうとすることが多かったのです。しかしながら、本会の先輩方は常に赤布を取り付けた細竹の束を携行し、往路で設置したものは復路で全て回収するという伝統的な方法を守って着実に下山なさいますし、天候の変化に応じて前進や撤退の判断も実にすばやく的確になさいます。セルフレスキューの技術や山岳に関する知識の普及にも力を入れていらっしゃいます。こうした真摯な姿勢を間近で目の当たりにして、私も^{おの}自ずと背筋を伸ばし、襟を正して山に入ろうとするようになりました。山は^{ふところ}懐深く登山者を迎え入れる一方で、ときに人知を超えた大いなる試練も与えようとします。そのときに、本会で学ぶことが役に立つであろうことは疑う余地がありません。

太古より人々とともにあった山々は、これからも永い年月をそこに座し続け

ることでしょう。その大いなる時の流れの端っこで、私は父や母に自然の美しさや楽しさを教わり、夫とともに自然を愛でて野生動物を慈しみ、仲間とともに山々へ歩み入る喜びを知りました。これからまた私は、どれほど多くの人々とその喜びを分かち合えることでしょうか。ともに歩んで下さる本会の先輩方は勿論のこと、山道で挨拶と微笑みを交わす人々、山小屋で一飯をともしる人々、山あいに笑い声を響かせてくれる子供たちとともに、山々に誘われながら生きて行きたいと思っています。どうか、これからもお導き下さいますようお願い申し上げます、近々またお目にかかれることを願い、新入会のご挨拶とさせていただきます。ここまで目を通してくださり、まことにありがとうございます。

山との出会いに感謝

松元秀平

昨年10月に日本山岳会宮城支部に入会しました松元秀平(まつもと・しゅうへい)と申します。出身は九州の宮崎ですが、一昨年の就職を機に仙台に来ることになりました。どうぞよろしくお願ひします。

さて、私の初めての山登り(ハイキング)は、熊本で大学3年生のときに行った金峰山(標高665m・熊本市)でした。2020年4月のこの時期は、まさに新型コロナウイルスの影響を受けている最中であり、大学で所属していたボート部の活動ができなくなっていました。

そこで、体力を維持するために何かトレーニングをしようと思ったことが、山に登った最初のきっかけです。人生で初めて山に登ったとき、驚きと感動の連続でした。まず驚いたことが、しっかりとした登山道が整備されていたことです。山での遭難のニュースを見てきたこともあり、山に対して危険という印象が強かったので、山登りは道無き道を歩くものだと思っていました。次に、登っている人です。山に人は殆どいないと勝手に考えていましたが、老若男女問わず多くの登山者で賑わい、皆さん生き生きとした姿で楽しそうに歩きました。山は寛容で、色々な人を惹きつける魅力があると、そのとき強く感じました。そして最後に、山で見た景色です。生い茂る緑、いつもより近い雲、一歩進むごとに変わる凸凹な自然の道、山頂から遠くに見える街など、どれも

今までに見たことのないような新鮮な景色ばかりでした。子供時代の冒険心がよく、胸の高鳴りが収まらなかったのを覚えています。

それからは、私の気持ちは山に向かっていました。時間を見つけては当時、所有していた原付(バイク)で山に出掛けていました。家の近くの丘みたいな山から始まり、標高 1000 程度の低山、そして九州の名峰へと足を伸ばしました。噴火の痕跡を匂わせる雲仙普賢岳(長崎)、広大な草原が眼下に広がる阿蘇山(熊本)、縦走が楽しめる九重連山(大分)、ダイナミックな火山を感じられる霧島山(宮崎



▲眼下に広がる阿蘇の草原

・鹿児島)、原生林に覆われた祖母山(宮崎)、綺麗な円錐形をした開聞岳(鹿児島)など、挙げれば切りが無いですが、どの山行も大切な思い出として、心の中に深く刻み込まれています。地元の低山から百名山と呼ばれる山まで、どの山もそれぞれの地形や歴史、風景など様々な個性を持っており、各々の魅力があると感じます。そこから、九州以外にも全国のいろいろな山に登ってみたいと思うようになり、大学を卒業してからの就職先は、全国転勤の仕事を選びました。

そこで、最初の勤務地が仙台市となりました。東北にきてからも、休日を利用して山に出掛けていました。そんな中で、私の山登りに対しての向き合い方が変わったのは、12月に登った安達太良山(1700m・福島)でした。鹿児島の友人と二人で、山小屋泊の1泊2日の行程でした。下調べ段階で、何となく積雪状況は分かっていたので、アイゼン(クランポン)やストックなどの雪山装備、防寒対策を準備してました。

しかし、いざ山に入ると、そこには白銀の世界が広がっており、どこが登山道なのかも全く分かりません。九州の山では考えられないことでした。一時は危険と判断し撤退を考えましたが、たまたまガ



イド付きの団体ツアーと遭遇したため、後ろから付いて行き、無事に登頂することができました。この経験から、登山は楽しいばかりでなく、十分な計画と準備、そして正しい知識と経験が必要だと身にしみて感じました。そこで登山技術を身に着けたいと思

い、日本山岳会入会を決めました。

山岳会に入会してからは、泉ヶ岳の登山教室、霊山の初冬山行、後烏帽子岳の厳冬期山行などの活動に参加しました。登山経験が豊富な方と山に登る中で、山に関する話をたくさん聞くことができ、とても勉強になることばかりでした。私自身の山の世界が広がったように感じました。これからも山岳会の活動に参加しながら登山の経験値を増やし、また安全登山の知識を身につけた上で、難易度の高い山にも果敢にチャレンジしていきたいと考えています。そして何より、山を楽しめたらと思っています。皆さま、どうぞよろしくお願い致します。

(お願い)第28号の「紀行・随筆およびエッセー」への投稿が、会員お一人のみでした。会報『宮城山岳』は会員、支部友みなさまの会報です。青春時代のなつかしい山行、最近登った山の思い出など、テーマは問いません。次号に向け皆様からのご投稿を編集出版委員一同、お待ちしております。尚、年内、いつでも鳥山委員宛にメールで送っていただいても構いません。何卒よろしくお願い申し上げます。



▲台湾・玉山のシャクナゲ(撮影：冨塚和衛会員)

宮城支部 定例事業の概要

(1)令和6年度通常総会の開催

令和6年4月25日(木)、仙台駅東口にある仙台市生涯学習支援センターで開催された。出席会員13名に委任状12名と、議決権を有する会員総数40名の過半数を超え、総会は成立した。



▲各議案を審議した宮城支部総会

はじめに千石支部長が「日本山岳会は来年、120周年を迎え、さまざまな記念事業が佳境に入っています。そうした中、橋本しをり会長は“理念づくり”をスローガンにかかげ、山の楽しさを薦めていきたいと表明しています。宮城支部も会長の理

念に添い、楽しく安全に登山していきましょう。今年は安全登山の啓蒙を図る登山教室を実施しますので、是非ご参加ください」と挨拶。このあと規約により千石支部長を議長に選出し早速、議題に入った。

第1号議案「令和5年度事業報告」を富塚事務局長が説明。この中の共益事業の「山の天気ライブ授業」は、事業内容から「公益事業」に組み入れることになる。

第2号議案「令和5年度収支決算報告」は千石役員が説明。この中で支出の部「印刷製本費」の備考「宮城山岳通信」は「宮城山岳」の間違い。また「その他(上記以外の費用)」の当期決算額が空白となっているのは「0」と修正した。この決算書の監査について会計監査の草野洋一、横山哲の両会員より適正であると報告があった。1号、2号議案は採決の結果、拍手多数で承認された。

第3号議案「令和6年度事業計画(案)」は富塚事務局長が説明。その中の「登山教室事業」は、登山に関心のある一般県民を対象に、外部から講師を招いて年2回実施し、登山者自らリスク回避できる知識や技術を身につける公募型の登山教室にリニューアルすることになった。また年度スケジュール表の中で何件か日程変更と日本山岳会120周年記念事業の「熊野古道 集中山行」(5月17～19日)が新たに事業計画のスケジュールに追加された。

第4号議案「令和6年度収支予算(案)」について千石役員が、登山教室事業の実施に際し、新たな科目を収入と支出の部にそれぞれ新設したことを説明。また「支部友会費」で前年は支部友が10名であったが2名退会し8名になったと報告。続いて支出の部「会議費・会場等借用費」の備考にある「シルバーセンター会議室」は使えなくなったので削除と補足説明があった。3号、4号議案は採決の結果、拍手多数で承認された。

続く第5号議案「役員の選任(案)」について、富塚事務局長が新役員として鈴田則文(会員番号17201)、鈴田泰子(同17207)、



▲千石支部長(左)と富塚事務局長(右)

八尾寛(同 17252)の選任を諮った結果、拍手多数で承認された。

最後の第6号議案「個人情報保護管理指針制定(案)」は富塚事務局長より説明。会員連絡網の整備並びに会員相互の交流を図る会員名簿の作成もあり、宮城支部に限っての指針を設けたと指針案を説明した。出席会員より2件ほど要望があり、事務局内で盛り込むことで6号議案は拍手多数で承認された(第6条に2と3を新たに追加した最終の「宮城支部個人情報保護管理指針」を次頁に掲載)。この規程は令和6年4月25日より施行となる。

このあと、新しく役員に選任された鈴木則文、鈴木泰子、八尾寛の各会員が抱負を述べ、富塚事務局長の締めめの挨拶で午後7時すぎ閉会した。このあと会場を仙台駅西口の居酒屋に移し、会員有志で懇親を深めた。

(報告者：鳥山文蔵)

公益社団法人日本山岳会宮城支部 個人情報保護管理規程

(令和6年4月25日制定)

(目的)

第1条 この規程は、公益社団法人日本山岳会宮城支部(以下「本支部」という)が保有する個人情報を適正に取り扱うための事項を定めることにより、本支部活動の円滑な運営を図るとともに、個人の権利利益を保護することを目的とする。

(責務)

第2条 本支部は、個人情報の保護に関する法律(平成15年法律第57号。以下「法」という)その他関係法令等を遵守するとともに、本支部活動において個人情報の保護に努めるものとする。

(周知)

第3条 本支部は、この規程を総会資料により、少なくとも毎年1回は、会員、準会員、支部友会員(以下「会員等」という)に周知するものとする。

(個人情報の取得)

第4条 本支部は、支部長が本支部規約第5条、又は、本支部友会会則第6条の規定に基づく入会申込書を受理し、役員会の承認を得ることにより、個人情報を取得するものとする。

- 2 本支部が取得する個人情報、会員名簿の作成に必要な氏名、住所、生年月日、電話番号、メールアドレス、会員等番号及び緊急連絡者、その属性、緊急連絡者の電話番号の事項とする。

(利用)

第5条 本支部が収集し保有する個人情報は、次の目的に沿った利用を行うものとする。

- (1) 会員相互の親睦活動・組織運営のために必要な公益社団法人日本山岳会(以下「本部」という)・本支部におけるデータベースの作成
- (2) 総会、会議の開催、晩餐会等、本支部主催の行事の告知及び参加者集計
- (3) 会報「宮城山岳」・「宮城山岳通信」等の配信・送付
- (4) 本部・本支部・他支部主催の山行実施時における登山計画書の作成
- (5) 本支部の活動に必要な会員等同志間の連絡
- (6) 本支部が会員相互の親睦を目的に作成した会員限定で配布する会員等名簿

(管理)

第6条 収集した個人情報は、支部長又は支部長が指定する事務局長が保管し、適正かつ厳重に管理するものとする。

- 2 収集した個人情報は、前第5条の規定に定める事項に関し、必要な限度で情報を会員等に提供することが出来る。
- 3 前項により個人情報の提供を受けた者は、個人情報を適正かつ厳正に取り扱うものとする。
- 4 不要となった個人情報は、適正かつ速やかに廃棄するものとする。

(提供)

第7条 個人情報は、次に掲げる場合を除き、あらかじめ本人の同意を得ないで第三者には提供しない。

- (1) 法令に基づく場合
- (2) 人の生命、身体又は財産の保護のために必要で、本人から同意を得ることが難しい場合
- (3) 公衆衛生の向上又は児童の健全育成の推進に必要で、本人から同意

を得ることが難しい場合

- (4) 国の機関若しくは地方公共団体又はその委託を受けた者が、法令事務を遂行するにあたって協力する必要がある、かつ本人の同意を得ることで事務遂行に影響が生じる可能性がある場合。

(開示)

第8条 会員等は、第4条の規定に基づき提供した会員等本人の個人情報について開示を請求することができる。

- 2 本支部は、会員等本人から会員等本人の個人情報の開示について請求があったときは、本人に開示するものとする。

(個人情報の訂正・利用停止等)

第9条 本支部が会員等から取得し、保有している個人情報について会員等本人から訂正・利用停止等を求められた場合、速やかに訂正・利用停止等を行うものとする。ただし、各会員等にすでに配布されている会員等名簿等は、会員等に連絡することをもって、これに替えることができるものとする。

(苦情相談等)

第10条 本支部における、開示請求、訂正等請求、利用停止等請求及び苦情相談等の窓口は、事務局長とする。

附則

- 1 この規程は、令和6年4月25日から施行する。

(2) 月例支部役員会の開催

定例支部役員会を下記の日程で、仙台市シルバーセンターの会議室において開催した。支部事業の円滑な推進を図るとともに、支部が抱える諸課題などについて話し合いを重ね、解決策を探った。

開催日：令和5年5月17日(水)、6月15日(木)、7月28日(金)、9月20日(水)、11月15日(水)、令和6年1月17日(水)、3月20日(水)

尚、10月と2月の役員会は、諸事情により中止した。

(3) 支部会報・機関誌の発行

支部会報として「宮城山岳通信」、及び支部機関誌として『宮城山岳』を下記の通り発行した。

○会報「宮城山岳通信」

第 29 号(令和 5 年 7 月 14 日)、第 30 号(令和 5 年 9 月 7 日)、第 31 号(令和 6 年 1 月 22 日)を発行、メール配信した。

○機関誌『宮城山岳』第 27 号(令和 5 年 6 月 8 日)を発行

宮城支部 収支会計報告

(1) 令和5年度 収支決算書

収入の部

(単位：円)

科 目	当期予算額	当期決算額	増減額	備 考
① 前期繰越金	220,078	220,078	0	
本部から運営交付金	35,000	35,000	0	基準会員 33 名 + 報奨金 1 名
本部から事業補助金	35,000	35,000	0	々
補助金・助成金収入	0	0	0	
支部友会費	24,000	33,000	9,000	10 名 (1 名は 2 年分入金)
支部行事参加費	60,000	54,000	-6,000	
雑収入	5,000	27,902	22,902	親子登山(深山)の会費等
その他	0	0	0	
② 収入合計	159,000	184,902	25,902	
③ 総収入(①+②)	379,078	404,980	25,902	

支出の部

科 目	当期予算額	当期決算額	増減額	備 考
臨時雇賃金	0	0	0	
支払報酬・謝礼金	0	3,000	3,000	古道調査協力者
旅費／交通費	25,000	15,920	-9,080	支部連絡会議出席
通信費／運搬費	30,000	17,860	-12,140	切手・はがき等
会議費・会場等借用費	20,000	38,846	18,846	シルバーセンター
消耗品費／コピー代	50,000	32,899	-17,101	インク、コピー用紙代
印刷製本費	53,000	62,210	9,210	「宮城山岳」第 27 号
支払手数料	3,000	916	-2,084	
慶弔費	0	0	0	
雑費	15,000	36,290	21,290	講師宿泊費、古道手拭購入
その他(上記以外の費用)	183,078	0	-183,078	
資産購入代金	0	0	0	
④ 支出合計	379,078	207,941	-171,137	
次期繰越金(③-④)	0	197,039	197,039	

(2) 令和6年度 収支予算書

収入の部

(単位：円)

科目	前期予算額	当期予算額	増減額	備考
① 前期繰越金	220,078	197,039	-23,039	
本部から運営交付金	35,000	44,000	9,000	基準会員36名+新入会4名
本部から事業補助金	35,000	44,000	9,000	々
補助金・助成金収入	0	0	0	
支部友会費	24,000	24,000	0	8名
支部行事参加費	60,000	60,000	0	@500円
登山教室会費	0	100,000	100,000	@2,000円×延べ50名
雑収入	5,000	5,000	0	
その他	0	0	0	
② 収入合計	159,000	277,000	118,000	
③ 総収入(①+②)	379,078	474,039	94,961	

支出の部

科目	前期予算額	当期予算額	増減額	備考
臨時雇賃金	0	0	0	
支払報酬・謝礼金	0	30,000	30,000	登山教室講師
登山教室費用	0	85,000	85,000	交通費、保険料、予備費など
旅費／交通費	25,000	15,000	-10,000	全国支部連絡会議など
通信費／運搬費	30,000	20,000	-10,000	切手・はがき等
会議費・会場等借用費	20,000	20,000	0	
消耗品費／コピー代	50,000	40,000	-10,000	インク、コピー用紙代
印刷製本費	53,000	60,000	7,000	「宮城山岳」第28号
支払手数料	3,000	3,000	0	
慶弔費	0	0	0	
登山教室補助金	0	15,000	15,000	2回分
雑費	15,000	15,000	0	
その他(上記以外の費用)	0	0	0	
資産購入代金	0	0	0	
支出合計	196,000	303,000	107,000	
次期繰越金	183,078	171,039	-12,039	

編集後記

昨年の夏は記録的な猛暑、この冬は暖冬・少雪のシーズンとなり、夏場に向けての渇水が心配されるようです。そうした中、今年も全国の山岳観光道路が除雪され開通しました。しかし、雪の回廊は例年より積雪量が少なかったようです。一方、東北の近海では海水温の高い海域で獲れる魚が豊漁のようです。こうした温暖化、異常気象の波が、“山の民・海の民”はもちろん、私たち“街の民”にも、ひたひたと押し寄せているかのようです……。

さて、足かけ3年にわたる山岳古道調査が終了しました。それぞれの実地踏査に携わった特別調査委員会のチーフ並びに委員の皆様に敬意を表したいと思えます。宮城支部が担当した5つの古道には、私たちの祖先が山と深くかかわりながら暮らしてきた痕跡が残っていました。その一方、戦後の山麓開発並びに自然放置による古道の荒廃にも気づかされました。

来年には本会より調査報告書並びに古道の携帯アプリ等が発表されることでしょう。我が宮城支部が調査した5つの古道に目や耳を澄ませば、宮城の文化遺産のひとつである古道物語がきっと甦ってくるに違いありません。そして、いにしえの人々が行き交った古道を体感できるトレイル計画が待ち望まれます。

(会報・編集出版委員長 鳥山文蔵)

公益社団法人 日本山岳会宮城支部会報

宮城山岳 第28号

発行日 2024年5月21日

発行人 千石信夫

会報・編集出版委員会 鳥山文蔵、千石信夫、富塚和衛、三宅 泰

事務局 〒983-0821 仙台市宮城野区岩切字畑中9-12(富塚宅)

連絡先：TEL 090-2790-3771



新高山(現玉山)登山口